

# バカと僕と召喚獣

藤崎海斗

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

雄二とある約束をした青年北山智也はAクラスに入れる実力をもちながらもFクラ  
スにはいり明久達と共に試験召喚戦争を行う!!

# 目次

第七問～Bクラス戦終結＆戦後対談～

94

キヤラ設定オリキヤラ&原作キヤラ

1

試召戦争

プロローグ&第一問

第二問～勝利への布石～

第三問～Dクラス戦開始!!～

第四問～Dクラス戦終結&戦後対談!!

清涼祭

閑話休題

僕と雄二の約束&王様ゲーム

僕と美波の初デート？

第十問～準備中 清涼祭①～

151 142 127

第九問～Aクラス戦終結&戦後対談～

113

第八問～Aクラス戦 交渉&戦闘開始

第六問～Bクラス戦開幕!!～

74 61 49

第五問～Dクラス戦後&楽しいお弁当

!!

第十一問～準備中 清涼祭②～

!!

161

第十二問 〔清涼祭開始!!〕

# キャラ設定オリキャラ＆原作キャラ

北山智也（きたやまともや）

容姿俺の脳内選択肢が、学園ラブコメを全力で邪魔しているの甘草奏  
性格 ボーツとしているような感じだがしつかりと考えていて頭が雄二並にきれる。  
優しい。怒ることはないといつても過言ではない。でも怒ると静かに言葉で責め立て  
てくる。雄二とある約束をした。

## 成績

国語社会系、生物が得意

現代国語 480 ↘ 580

古典・漢文 450 ↘ 540

日本史 460 ↘ 570

世界史 450 ↘ 550

地理 460 ↘ 560

英語 380 ↘ 450

英語W 390 ↘ 480

## 2 キャラ設定オリキャラ&原作キャラ

数学	340	380
化学	330	370
物理	320	360
生物	400	480
保健体育	400	450
吉井明久	総合点数	4860
		6350
容姿、性格、成績		の間ぐらい
土屋康太		
原作通り		
木下秀吉		
容姿、性格、成績		
原作通り		
島田美波		
容姿、性格、成績		
原作通り		
島田美波		

原作通り	姫路瑞希
坂本雄二	容姿、性格
原作通り	成績
成績	現代国語
300	350
古典・漢文	日本史
320	370
世界史	340
390	430
地理	380
430	430
英語	350
W350	390
数学	350
400	390
化学	350
350	390
340	480
340	000

#### 4 キャラ設定オリキャラ&原作キャラ

物理	360	390
生物	320	370
保健体育	360	410
総合点数	4200	4800の間ぐらい
霧島翔子		

容姿、成績  
原作通り

性格

雄二にたいしてかなり優しくなる  
その他原作通り

工藤愛子

容姿、性格、成績

原作通り

久保利光

容姿、性格、成績

原作通り

木下優子

容姿、性格、成績

原作通り

その後のちのち皆の成績が上がっています

科目は、現代国語、古典・漢文、日本史、世界史、地理、英語、英語W、数学、化学、物理、生物、保健体育の12科目にします。

書くことがなくなつた……

でも1000字越えないと投稿できないし。

作者こと藤崎海人のバカテスが好きになつた理由つ!!!!

バカテスは友達に進められて読んでみたら面白くてはまつてしましました。

明久は相変わらずバカですね

雄二も明久に対して鬼畜

でも僕は雄二が個人的にお気に入りキャラです。いつもは明久をからかつてているのに試験召喚戦争になると超真剣!!このギャップも好きな理由の1つです。

あと何だかんだ言つて明久を信頼している、じゃないとBクラス戦や9巻のCクラス戦だつて勝てなかつたんじやないかと思つたりもします。

あと、何故この小説がアンチなしかというと作者が単純にアンチがあまり好きではないからです。

美波と瑞希にだつていいところはたくさんあるのに……と思つてたり。  
あつ知らない間に1000字越えてるやつた!!

忘れてた……

召喚獣設定つ！（変更のある人だけ）

北山智也

服装 忍者（康太のよりいい感じ）

武器 太刀

腕輪 『クリエイト』

能力 名前の通り創造してものを作り出す（武器、腕輪も可）

例

小刀→20点

弓→40点

銃→60点で感じです。

行動中に武器の変更可能

坂本雄二

腕輪『クラッシュ』

## 能力

点数消費をした分だけ一発一発の攻撃力が上がる。

# 試召戦争

## プロローグ & 第一問

僕らが文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

花を愛でている雅な人間でなくとも、その眺めには一瞬目を奪われる。

でも、それは

一瞬のことなせなら

明久「遅刻だあ～～～～！」

智也「どうしてこういう日まで寝坊できるの？ 1種の才能？」

明久「なにその言い方！ あつ学校着いたよ！」

西村「吉井、北山遅刻だぞ」

明久「あ、鉄じーーじやなくて、西村先生。おはようございます。」

智也「色々あつて遅刻しました、すいませんでした」

西村「吉井今鉄人つて言わなかつたか？」

明久「気のせいじゃないですか？」

西村「そうか、まあいいほら受けとれ」

智也「どうしてこんな面倒なやり方でクラスを発表するんすか?」

西村「普通はそうなんだがな。ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな」

智也「ふーん。そういうもんなんですか?」

だからわざわざ一枚一枚封筒に入れてるのか でもクラスなんて見なくとも分かつてるんだけどな

西村「吉井、今だから言うがな」

明久「はい、なんですか?」

西村「俺は、お前を一年間見て、『もしかすると、吉井はバカなんじやないか?』なんて疑いを抱いてだんだ」

智也「西村先生もですか? 実は自分もなんです。」

明久「智也まで、そんな誤解をしているようじや、さらに『節穴』なんて渾名つけられちゃいますよ?」

西村「ああ。振り分け試験の結果を見て、自分の間違いに気づかされたよ」

智也「僕もお前に勉強を教えてきて間違いに気づいたよ」

西村、智也「喜べ、吉井(明久)。お前への疑いはなくなつた」

『吉井明久…… Fクラス』

西村、智也 「お前はバカだ」

西村 「そういえば北山、あの結果はなんだ?」

智也 「振り分け試験ですか? ちょっとした約束をしたんですよ 後悔はしませんから」

西村 「そうか。お前がいいならいいが、だが惜しいなお前ならAクラスは確実だつたのに」

智也 「いいんですよこれで」

『北山智也…… Fクラス』

こうして僕たちの最低クラスの生活が幕を開けた。

—————

明久 「……なんだろう、このばかデカイ教室は」

智也 「これがAクラスか、凄いな」

高橋 「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年Aクラス担任、高橋洋子です。

宜しくお願ひします」

彼女が告げると、黒板ではなく壁全体を覆う程の大きさのプラズマディスプレイに教師の名前が表示された。あれ、いつたいいくらするだろ?

高橋「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人工アコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

・・・「いないうですね、では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

霧島「・・・はい、霧島翔子です。よろしくお願ひします」

高橋「Aクラスの皆さん?これから1年間、霧島さんを代表として協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

智也「明久、そろそろ行くよ」

明久「うん、分かった」

Fクラスについたーー

智也「ここつて教室?」

明久「言いたいことは分かるけど入ろう」

智也「お、おーけー」

何故こんなに動搖しているかと言うとFクラスは見た感じどもはや廃墟という言葉がしつくりくるような教室だ。隣を見ると明久がなにか考えていた。そして明久が教室に入つていった

明久「すいません、ちょっと遅れちやいましたっ♪」

雄二 「早く座れ、このウジ虫野郎」

明久 「えつちよつとひどくない?」

智也 「よつ雄二」

雄二 「おつ智也きてくれたか」

智也 「約束は守れてる?」

雄二 「当たり前だ」

智也 「そつか、なら良かつた」

明久 「無視されてるつ!? そういえば雄二、何やつてんの?」

智也 「そんなことも分かんないのか? 雄二が代表だからに決まっているだろうが」

雄二 「よく分かつたな」

明久 「それについても流石はFクラスだね」

皆ごろごろしてたりとかゲームをしていたりとか様々だ。

福原 「ちょっと通してもらえますか?」

雄二達 「あ、すいません」

福原 「それではH Rを始めます。二年Fクラス担任の福原慎です。宜しくお願ひします。皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか? 不備があれば申し出してください。」

明久「せんせー、座布団に綿がほとんど入つてないです」

福原「あー、はい。我慢してください」

智也「先生、僕の卓袱台の脚が折れています」

福原「木工ボンドが支給されているので、後で自分で直してください」

ものが、あれば極力自分で調達するようにしてください。

では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひします」

秀吉「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる、今年一年よろしく頼むぞい」

康太「・・・・土屋康太」

美波「海外育ちで、日本語は出来るけど読み書きが苦手です。

あ、でも英語は苦手です。育ちはドイツだつたので。趣味はーー趣味は吉井明久を殴ることです☆」

明久「誰だつ!? 恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つ奴は!」

美波「はろはろー吉井、今年もよろしくね」

明久「あう。し、島田さん」

ん、もう僕の番だ

明久「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね

♪

Fクラス 『ダアアーリイーーン!!』

明久「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願ひします。」

あつ僕の番だ、てか明久なんてもん聴かせてくれるんだよ

智也「北山智也です。これから1年間よろしく」

そして自己紹介の途中不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて立っている女子生徒が現れた。

瑞希「あの、遅れて、すいま、せん・・・・」

F「えつ？」

福原「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

瑞希「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします」

F「はいっ！質問です！どうしてここにいるんですか？」

聞きようによつては失礼な質問が浴びせられる。でも、これはクラスにいる全員の疑問のはずだ。彼女の可憐な容姿は人目を引くし、なによりその成績が凄い。入学して最初のテストで学年二位を記録し、その後も上位一桁以内に常に名前を残しているほどだつた。

瑞希「そ、その、・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

Fクラス 「ああ、なるほど」

試験途中での退席は零点扱いになる。彼女は昨年度行われた振り分け試験を最後まで受けることができず、結果としてFクラスに振り分けられてしまつたという訳だ。

Fクラス

「そう言えば、俺も熱（の問題）がでたせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？アレは難しかつたな」

「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出しきれなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

これは想像以上にバカばっかりだ。

瑞希 「で、ではつ、1年間よろしくお願ひしますっ！  
き、緊張しましたあ・・・・」

明久 「あのさ、姫

雄二 「姫路」

瑞希 「は、はいつ何ですか？えーっと・・・・」

雄二 「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

智也 「じゃあついでに北山智也です。よろしくね」

瑞希 「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

雄二 「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

明久 「あ、それは僕も気になる」

瑞希 「よ、吉井君!?」

雄二 「姫路。明久がブサイクですまん」

智也 「ほんとごめんね」

瑞希 「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ・・・」

雄二 「そう言わると、確かに見てくれば悪くない顔をしているかもしねないな。俺の知人にも明久に興味を持つていてる奴がいたような気がするし」

明久 「え？ それは誰ーー」

瑞希 「それって誰ですか？ つ？」

雄二 「確か、久保一一利光だったかな」

久保利光 ♂（性別／オス）

明久 「・・・・・」

雄二 「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

福原「はいはい。そこの人たち、静かにしてくださいね。」

明久達「あ、すいませー」

バキイツバラバラバラ……

突如、先生の前で教卓がゴミ屑とかす。

福原「えー・・・替えを用意してきます。少し待つていてください」

明久「・・・・雄二、智也ちよつといい?」

雄二、智也「別に構わんが(いいよ)」

明久「この教室についてなんだけど・・・」

雄二「Fクラスか。想像以上にひどいもんだな」

明久「やつぱりそう思うよね

そこで僕からの提案。折角二年生になつたんだし、『試召戦争』をやってみない?」

智也「何が目的なの?」

明久「あまりにも酷い設備だから」

雄二「嘘をつくな。勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかのために戦争

を起こすなんて、あり得ないだろうか」

智也「もしかして、姫路さんのためかな?」

明久「どうしてそれを!」

雄二「やはり、そうか  
まあいい俺自身Aクラス相手に試召戦争をやろうと思つていたところだ  
理由は世の中学力が全てじやないつて、証明してみたくてな  
それにAクラスに勝つ方法も思い付いたしーーおつと、先生が戻ってきた。教室に入  
るぞ。」

明久、智也「はーい」

福原「坂本君、君が最後の一人ですよ」

雄二「了解。」

福原「坂本君はFクラス代表でしたよね?」

雄二「ああ、 Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなよ  
うに呼んでくれ

さて、皆に1つ聞きたい

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

Aクラスは冷房完備の上、座席がリクライニングシートらしいがーー  
不満はないか?」

Fクラス「大有りじやあ―――――っ!!!!」

「いくら学費が安いからといって、この設備は、あんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？あまりにも差がありすぎる！」

雄二「みんなの意見はもつともだ。そこで FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』

を仕掛けてみようと思う」

こうして戦争の引き金を引いた

## 第二問～勝利への布石～

雄二「——FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

F「勝てるわけがない」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

確かに誰が見てもAクラスとFクラスの差は圧倒的だ。

文月学園は点数に上限がないテストが採用されてから四年がたつた。

このテストには一時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。学力低下が嘆かれる昨今に生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争——試験召喚戦争と呼ばれる戦いだ。

要するにテストの点数＝召喚獣の力ということになるのでAクラスは最高クラスFクラスは最低クラスということになる。つまりAクラスとFクラスは雲泥の差なのだが目の前で立っている雄二はこう宣言した。

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

この自信はどこから出てくるのだろう？

F 「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「なんの根拠があつてそんなことを」

雄二 「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃つてている。それを今から説明してやる。

まず、おい康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい。」

康太 「・・・・・!!（ブンブン）」

姫路 「は、はわつ」

智也 「さすが康太、恥という言葉を知らないんだな」

康太 「・・・・・!!（ブンブン）」

雄二 「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者（ムツツリーニ）だ」

康太 「・・・・・!!（ブンブン）」

F 「ムツツリーニだと・・・？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・？」

「だが、見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ・・・」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・」

明らかな証拠というのは畠の跡だつたりする。

雄二 「姫路と智也は説明するまでもないだろう。皆だつてその力はよく知つてゐるはずだ」

瑞希 「えつ? わ、私ですかつ?」

智也 「おつやつと呼ばれた」

雄二 「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

F 「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

智也 「僕も紹介されたのにつ!! 酷いよ!!」

雄二 「木下秀吉だつている」

智也 「まさかの無視、もういいよ（ノド、）・・・」

F 「おお・・・・!」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・」

雄二 「当然俺も全力を尽くす」

F 「確かになんだかやつてくれそうな奴だ」

「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたか?」

「それじやあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが三人もいるつてことだよな！」

智也「名前は知らないけどありがとう!!」

氣づけばクラスの士気は確実に上がっていた。

雄二「それに、吉井明久だつている。」

・・・・・シン———

智也「いえーい明久／＼／＼／＼」

明久「智也ありがとう!! とにかく雄二! 僕の名前を呼ぶ必要なんてあつたの!?」

F「誰だよ、吉井明久つて」

「聞いたことないぞ」

明久「ホラ! 折角上がりかけて士気に翳りが見えてるし! 僕は雄二たちと違つて普通の人間なんだから普通の扱いをーーつて何で僕を睨むの? 士気が下がつたのは僕のせいじゃないでしよう!」

智也「いや、意外と明久のせいかも」

雄二「知らないなら、教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

F「・・・・それってバカの代名詞じやなかつたけ?」

明久「ち、違うよつ! ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で」

雄二「そうだ。バカの代名詞だ」

明久「肯定するな、バカ雄二！」

瑞希「あの、それってどのようなものなんですか？」

雄二「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚獣でこなすといった具合だ」

瑞希「そなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違つて力持ちつて聞きましたから、そんなことが出来たら便利ですよね。」

智也「実際はそんなもんじゃないらしいよ」

明久「教師の立ち会いがないと召喚出来ないから全然いいことないよ」

智也「しかもファイードバックが返つてくるらしいしな」

F「おいおい。『観察処分者』つてことは試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦し  
いつてことだよな」

「だよな。それならおいそれと召喚できぬヤツが一人いるつてことになるよな」

雄二「気にするな、どうせいてもいなくとも変わらない雑魚だ」

明久「雄二、そこは僕をフオローする台詞を言うべきところだよね？」

智也「そうだよ雄二、いくら明久が勉強が出来ないバカだからってそんな言い方良く  
ないと思うよ」

明久「ちよつ智也まで」

雄二「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う  
皆、この境遇には大いに不満だろう?」

Fクラス「当然だ!!」

雄二「ならば全員筆（ペン）を執れ！出陣の準備だ！」

Fクラス「おおーーっ!!」

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

Fクラス「うおおーっ!!」

瑞希「お、おー・・・・」

智也「いええくく!!」

雄二「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。無事大役を果たせ！」

智也「果たせ!!」

明久「・・・・・下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

雄二「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つていつて

みろ」

明久「本当に？」

雄二「もちろんだ俺を誰だと思っている　　大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すよ

うな真似はしない」

明久「わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ」

雄二「ああ、頼んだぞ」

明久は毅然とした態度でDクラスに向かつて歩いて歩いていった  
智也「雄二、明久生きて帰つてこれるかな？」

雄二「まあ大丈夫だろ」

智也「うん、そうだね」

そして数十分後

明久「騙されたあつ！」

雄二「やはりそうきたか」

明久「やはりってなんだよ！やつぱり使者への暴行は予想通りだつたんじやないか

！」

雄二「当然だ。そんなことも予想出来ないで代表が務まるか

明久「少しは悪びれろよ！」

瑞希「吉井君、大丈夫ですか？」

明久「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

美波「吉井、本当に大丈夫？」

明久「平気だよ。心配してくれてありがとう」

美波「そう、良かつた・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

明久「ああっ！もうダメ！死にそう！」

智也「島田さんは末恐ろしい人だな」

雄二「そんなことより今からミーティングを行うぞ」

瑞希「あの、痛かつたら言つて下さいね？」

秀吉「大変じやつたの」

秀吉が僕の肩を叩いて廊下に出る

智也「じゃあ明久ちゃんどこいよ」

「屋上にて」

雄二「明久。宣戦布告はしてきたな？」

明久「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

美波「それじゃ、先にお昼ご飯つてことね？」

雄二「そうだな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べろよ？」

明久「そう思うならパンでも奢つてくれると嬉しいんだけど」

智也「そいつは無理な相談だなあ明久」

瑞希「えつ？吉井君つてお昼食べない人なんですか？」

明久 「いや。一応食べてるよ」

雄二 「・・・・・あれは食べてると言えるのか？」

智也 「ほんとだよね僕は生きていけないよ」

明久 「失礼だな、何が言いたいのさ」

雄二、智也 「だつてお前の主食つて水と塩だろう（でしょ）？」

明久 「砂糖だつて食べているさ！」

瑞希 「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ・・・・・」

秀吉 「舐める、が表現としては正解じやろうな」

雄二 「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が、悪いよな」

明久 「仕送りが少ないんだよ！」

瑞希 「・・・・・あの、良かつたら私がお弁当を作つてきましようか？」

明久 「ゑ？本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

智也 「どんな生活送つてんの？」

瑞希 「はい。明日のお昼でよければ」

雄二 「良かつたじやないか明久。手作り弁当だぞ？」

明久 「うん！」

美波 「・・・・・ふーん瑞希つて随分優しいのね。吉井にだけ作つてくるなんて」

瑞希 「あ、いえ！その皆さんにも・・・」

雄二 「俺達にも？いいのか？」

瑞希 「はい。嫌じやなかつたら」

秀吉 「それは楽しみじやのう」

康太 「・・・・・（コクコク）」

智也 「助かるよ」

美波 「・・・お手並み拝見ね」

瑞希 「分かりました。それじや、皆に作つてきますね」

明久 「姫路さんつて優しいね」

実は僕、初めて会う前から君のこと好きーー」

雄二 「おい明久。今振られると弁当の話なくなるぞ」

智也 「そして明久はこのまま何も食べれずに餓死して逝くことになるよ？」

明久 「ーーにしたいと思つてました。」

秀吉 「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ」

雄二 「明久。お前はたまに俺の想像を越えた人間になるときがあるな」

智也 「もう格が違うよね」

明久 「だつて・・・お弁当が・・・」

雄二 「さて、話が逸れたな。試召戦争に戻ろう」

秀吉「雄二。1つ気になつていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろう？」  
智也「そんなの簡単なことだよ。Eクラスを攻めないのは戦うまでもない相手だからだよ」

明久「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

雄二「ま、振り分け試験の時点では、な。でも実際の所は違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみろ」

明久「えーっと・・・美少女二人と馬鹿が三人とムツツリが一人いるね」

雄二「誰が美少女だと!?」

康太「・・・・（ポツ）」

明久「雄二とムツツリーニが美少女に反応するの!?僕だけじやツツコミ切れない！」

秀吉「まあまあ。落ち着くのじや、代表にムツツリーニ」

雄二「そ、そうだな ま、要するにだ」

姫路と智也に問題のない今、正面からやりあつてもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスと戦つても意味がないってことだ」

明久「?それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

智也「そうだね、確実とはいえないと思うよ」

明久「だつたら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

雄二「初陣だからな。派手にやつて景気づけしたいだろ？それに、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだからな」

瑞希「あ、あの！」

智也「どうしたの姫路さん」

瑞希「えつと、その。吉井君と坂本君と北山君は、前から試合戦争について話し合っていたんですか？」

雄二「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為について明久に相談されて——」

明久「それはそうと！ さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

雄二「負けるわけがないさ お前らが俺に協力してくれるなら勝てる

いいかお前ら。ウチのクラスは——最強だ』

美波「いいわね。面白そうじゃない！」

秀吉「そうじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「……（グフ）」

瑞希「が、頑張りますっ」

智也「面白いこといつてくれるじやん」

雄二「そうか。それじや、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、僕らは勝利の為の作戦に耳を傾けた。

### 第三問 D クラス 戦開始!!

智也 side

智也 「皆が戦争してゐるのに僕は何をしてるんだ？」

先生 「北山君、試験中です。静かにしてください。」

智也 「くつあの日明久を待たず勝手に行つていれば良かった。こうなつたらさつさと試験終わらせてやる!!」

雄二 「おい、智也しつかりと試験受けろよ」

智也 「今回僕、戦えるのかな?」

明久 side

美波 「吉井! 木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入つたわよ!」

今現在前線にいるのは秀吉率いる先行部隊でそことFクラスの中間辺りに僕がいる中堅部隊が配置されている。知らない間に部隊長になつていた。だけど部隊長になつてる以上部隊の皆を導く義務がある。

まずは戦場の雰囲気を感じよう。

前線部隊の戦闘の様子を聞き取るんだ。

西村「さあ来い！この負け犬が」

F「て、鉄人!? 嫌だ！補習室は嫌なんだっ！」

西村「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たっぷりと指導してやるからな」

F「た、頼む！見逃してくれ！あんなあんな拷問耐えきれる気がしない！」

西村「拷問？そんなことはしない。

これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立てあげてやろう」

F「お、鬼だ！誰か、助けつーーイヤアアーー（バタン、ガチャ）

なるほど。

明久「島田さん、中堅部隊全員に通達」

美波「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

さつきの会話を聞いて僕が考えた作戦はただ一つ

明久「総員退避と」

美波「この意気地無し！」

殴られた、チヨキで

明久「目が、目があつ！」

美波「目を覚ましなさい、この馬鹿！あんたは部隊長でしょう！しつかりしなさい！」  
その覚ますべき目を潰した後の言葉じやない

美波「いい、吉井？ウチらの役割は

木下の前線部隊の援護でしよう？」

アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したら、アイツらが補給出来ないじやない！」

明久「ごめん。僕が間違つてたよ。

補習室を恐れずこの戦闘に勝利することだけ考えよう」

美波「それにこれは戦争なんだから多対一で戦えばいいのよ」

明久「そうだね。よし、やるぞ」

美波「うん。その意気よ、吉井！」

F 「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

美波「総員退避よ　　吉井、総員退避で問題ないわね？」

明久「よし逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

美波「そうね、ウチらは精一杯努力したわ

横田「代表より伝令があります。

ん？横田じゃない。どうしたの？」

『逃げたらコロス』

明久「全員突撃しろおーっ！」

僕は補習よりも命が惜しいんだ！

秀吉「明久、援護に来てくれたんじやな！」

明久「秀吉、大丈夫？」

秀吉「うむ。戦死は免れておる。

じやが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまつたわい」

明久「そつか。それなら早く戻つてテストを受け直してこないと」

「戦闘場所」

美波「吉井、見て！」

五十嵐先生と

布施先生よ！Dクラスの奴ら、科学教師を引っ張つてきたわね！」

明久「島田さん、化学に自信は？」

美波「全くなし。60点台常連よ」

明久「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近付かないように注意しながら学年主任のところに行こう」

美波「高橋先生のところね？了解！」

美春「あつ、そこにいるのはもしや、美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来てくだ

さい！」

美波「くつ！ぬかつたわ！」

明久「よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！」

美波「ちよつ・・・・・！普通逆じやない!?『ここは僕に任せて先を急げ！』じゃないの!？」

明久「そんな台詞、現実世界じや通用しない！」

美波「よ、吉井！このゲス野郎！」

美春「お姉さま！逃がしません！」

美波「くつ、美春！やるしかないってことね・・・・！」

サモン

美春、美波「——試獣召喚つ！」

美春「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待つていてました・・・・」

美波「ちよつとつ！いい加減ウチのことは諦めてよ！」

美春「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さんなんです！」

美波「来ないで！ウチは普通に男が好きなの！」

美春「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

美波「このわからずや！」

美春「行きます、お姉さま！」

二人の召喚獣の距離が詰まる。いよいよ戦闘開始だ。

美波「はあああっ！」

美春「やあああっ！」

それぞれの召喚獣が武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べが始まつた。

美波「こーーのっ！」

美春「負けません！」

見ている方まで力が入りそうな鍔迫り合いを繰り広げる二人の召喚獣

明久「島田さん！向こうの方が点数が高いんだよ！、真正面からぶつかつたら不利だよ！」

美波「そんなこと言われなくてもわかつてゐるけど、細かい動作は出来ないのっ！」

美春「ここまでです」

美波「くうっ！」

島田

美波

F クラス

化学

53点

VS

清水美春

Dクラス

94点

島田さん、サバ読んでたな。本当は60点にすら届いてないじゃないか

美春「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

美波「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

美春「補習室？・・・ふふつ

お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」

美波「よ、吉井、早くフオローを！」

今のウチの状況は補習室送りよりも危険な状況にいる気がするの！」

美春「殺します・・・。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します・・・」

明久「島田さん、君のことは忘れない！」

美波「ああつ！吉井！なんで戦う前から別れの言葉を！？」

少し前智也 side

智也 「先生後何が残ってる?」

先生 「今ので全部終りましたよ」

智也 「えつマジですか、よつしやじやあ雄二行つてくるよ」

雄二 「おう、思う存分に暴れてこい!!」

智也 「了解!!」

そして明久 side

美春 「邪魔物は殺します!」

今度は敵がこつちにやつて來た!ヤバイつて

須川 「吉井、危ない!――サモンつ」

Fクラス

須川亮

化学

76点

V  
S

Dクラス  
清水美春

41点

須川君の召喚獣が敵を斬り倒す

須川「島田、大丈夫か?」

美波「助かつたわ須川」

美春「お、お姉さま! 美春は諦めませんから!」このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね!」

とても危険な捨て台詞を残し、清水さんは補習室へと連行されていった。色々な意味で危ない戦いだつた。

美波「吉井」

明久「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻つて化学のテストを受けてくるといいよ」

美波「吉井」

明久「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ」

美波「吉井いつ!」

明久「は、はいつ」

美波「・・・ウチを見捨てたわね?」

明久「記憶にございません」

美波、明久「・・・・・・・・」

美波 「死になさい、吉井明久！サモー！」

明久 「誰か！島田さんが錯乱した！」

本隊に連行してくれ！」

須川 「島田、落ち着け！吉井隊長は見方だぞ！」

美波 「違うわ！こいつは敵！ウチの最大の敵なの！」

明久 「す、須川君、よろしく」

須川 「了解」

美波 「こら、早く放しなさい須川！」

吉井！絶対に許さないからね！」

明久 「は、早く連れて行つて！なんかその禍々しい視線だけで殺されそうだ！」

美波 「ちょっと、放し——殺してやるんだから——！」

僕が身の安全が確保できてほつとしていると

智也 「明久、さつき島田さんが吉井！絶対殺してやる——って叫んでたけど今度は何をやつたんだ？」

明久 「まあ、色々とそれより智也はやくない？」

智也 「ああ、その事ね。実は全教科受けないといけないんだけど戦争には参加したいつ！！ということで全部のテスト適当に受けてきました！」

明久 「え？」

智也 「まあ雄二に言っていた本当の点数で戦うなって言われてたから一石二鳥つて感じ？ とりあえずはやく戦いにいこー」

明久 「あ、うん！ とにかく秀吉達が補給をーー」

智也 「明久隊長！ もう戦つちゃいましょようよう 横山の役割は姫路さんが補充する時間稼ぐ事なんだから戦つてもなんの問題もないはず！」

明久 「えつでもーー」

智也 「よし、中堅部隊の皆つ!! 僕らの役割は言うならば時間稼ぎだ！ 時間さえ稼げればいいんだ！だから今から中堅部隊は攻めに転じる！ 敵も倒せて時間も稼げるなら一石二鳥！ さあ一気に行くよ!!」

中堅部隊 「よつしやああーー!!」

智也 「と言うわけで明久部隊長後はよろしく♪」

明久 「えつちよつあーもう！ 分かつたよ！ よし皆一気に攻めるよ」

智也 side

智也 「Fクラス北山智也、 Dクラス鈴木君に化学勝負を申込みます！」

サモンつ!!」

鈴木 「くつサモンつ!!」

F クラス

北山智也

化学

140点

V  
S

D クラス  
鈴木一郎

98点

鈴木「くつお前ほんとにFクラスか」

智也「さあ勝負っ!!」

僕は点数の差を利用していっきに敵との間合いをつめ

「シユタツ」

鈴木「は?」

F クラス

北山智也

化学

V  
S

Dクラス

鈴木一郎

D E A D

体を思いつきり切断した。

智也「くく、なにこれちょー楽しいんですけど」

意外と戦うのが好きな智也だった。

明久 s i d e

明久「くつこのままじゃ時間が足りない！」

そうだ！須川君！』

須川「なんだ？」

明久「偽情報を流してほしいんだ」

須川「偽情報？すぐにばれるんじやないか？Dクラスで指揮をとつてる塙本は声が大きいから、すぐにその場を收められてしまうぞ」

明久「でも大丈夫。対象はDクラスじゃないから」

須川「と、言うと?」

明久「先生達に流すんだよ。他の場所に向かってくれるようにな」

須川「・・・なるほど。それは確かに効果的だな」

明久「でしよう?」

須川「ああ。流す嘘情報の内容は任せてくれ。確実に騙してみせよう」

明久「うん、よろしく」

D「塙本、このままじゃ埒があかない!」

塙本「もう少し待つていろ!今数学の船越先生も呼んでいる」

くつこれは不味い、これ以上戦線が拡大されると実力差がはつきり表にでてしまう  
さてどうしよう・・・

ピンポンパンボーン

『連絡致します

船越先生、船越先生 吉井明久君が体育館裏で待っています

生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

えつ?須川君?何てことを言つてるのだつてあの船越先生だよ

婚期を逃して、生徒達に単位を盾に交際を迫るようになった、船越先生だよ。

F「吉井隊長・・・・あんたあ男だよ」

「ああ、クラスのためにそこまでやるなんて」

D 「おい、聞いたか今の放送?」

「Fクラスの奴ら本気で勝つに来てるぞ」

「あんな意志を持つていてるFクラスに本当に勝てるのか?」

F 「皆、吉井隊長の死を邪魔するな!」

「絶対に勝つぞ」

盛り上がりつた士気で戦うことしばし

戦力差の影響が現れ始め、次々と悪い報告が聞こえてた  
だかただ一人この状況を楽しんでいる人がいた

智也 「ははは、そんな攻撃無駄だよ

これで終わりい!!」

F クラス

化学

90点

D クラス

V S

×5人

北山智也

D E A D

塙本「くそつ！ここは退くぞ！全員遅れるな」

智也「あ、もう終わり？」

それから少したつたところで雄二がやつて來た

雄二「よくやつてくれた明久、智也

とりあえず明久達を回収したら一旦戻るぞ」

僕らは、部隊を立て直す為、荒れに荒れた戦場を後にした

# 第四問～Dクラス戦終結＆戦後対談！！～

雄二「良くやつた」

教室に戻つてからまたもや雄二一らしくもない言葉を口にした。僕を素直に誉めるなんてどういう風のふきまわしだろう疑問に思いながらその顔を見る。

めちゃくちや晴れやかな笑顔だつた

それはもうムカつくくらいに

さてはこの男――

明久「校内放送、聞こえてた？」

雄二「ああ。ばつちりな」

明久「そんなことより須川君がどこにいるか知らない？」

智也「もうすぐ戻つてくるんじゃない？」

明久「やれる、僕なら殺れる」

雄二「殺るなつての」

智也「あ、そういえば明久」

明久「なに？」

智也 「あの放送指示したの雄二だと思うよ?」

明久 「死ねえええっ!!」

雄二 「おい! 落ち着けそれは智也の推測だろ? 僕がやつたとは限らないだろ」

明久 「あ、それもそつか」

雄二 「まあ俺が指示したんだがな」

明久 「やつぱりかああーつ!」

雄二 「あ、船越先生」

智也 「流石の明久も自分の身を大事にするか」

雄二 「さて、馬鹿は放つておいて、そろそろ決着つけるか」

秀吉 「そうじやな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合いじやろ

う

康太 「・・・・(コクコク)」

智也 「そーだねー」

雄二 「おっしゃ! Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ!」

F 「おう!」

雄二 「あー、明久 船越先生が来たってのは嘘だ」

え、嘘? 誰もいない…

明久「逃がすか、雄二いつ！」

（戦闘場所）

雄二「下校している連中に溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

明久「雄二！どこだあ！首を洗つてーー！」

平賀「援護にきたぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

F「Dクラスの本隊だ！遂に動き出したぞ！」

平賀「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

D「おおーー！」

雄二「Fクラスは全員一度撤退しろ！人混みに紛れて攪乱するんだ！」

平賀「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追い詰めて討ち取るんだ！」

こそこそ逃げ回っている僕の視界に平賀君の姿が入った。もう間に邪魔な近衛部隊がいないほどに防備が薄くなっている。

明久「チャンスつ！ 向井先生！Fクラス吉井がーー」

玉野「Dクラス玉野美紀、サモン」

明久「なつ！近衛部隊!？」

平賀「残念だつたな、船越先生の彼氏クン?」

明久「ち、違う!アレは雄二が勝手に」

平賀「そんなに照れなくともいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を」

玉野「分かりました。」

明久「ちくしょう!あと一步でDクラスを僕の手で落とせるのに!」

平賀「何を言うかと思えば、彼氏クン。いくら防御が薄く見えても、流石にFクラスの人が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう?」

ま、近衛部隊がいなくともお前じや無理だらうけど」

明久「それは同感。確かに僕には無理だらうね。だから――

姫路さんよろしくね」

平賀「は?」

瑞希「あ、あの・・・」

平賀「え?あ、姫路さん。どうしたの?Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけ

ど」

瑞希「いえ、そうじやなくて・・・

Fクラスの姫路瑞希です。よろしくお願ひします。」

平賀「あ、こちらこそ」

瑞希「その・・・Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

平賀「・・・はあ。どうも」

瑞希「あの、えつと・・・さ、サモンです」

Fクラス

姫路瑞希

現代国語

339点

V S

平賀

源二

Dクラス

129点

平賀「え？ あ、あれ？」

瑞希「ごめんなさいっ」

相手の反撃も許さず、一撃Dクラス代表を下して、この戦いの決着となつた。

Dクラス代表

平賀源二

討死

Fクラス「うおおーーっ！」

F 「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。あれはDクラスの連中のものになるからな」

「坂本雄二サマサマだな」

「やつぱりあいつは凄いやつだったんだよ」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛してます！」

雄二 「あー、まあなんだ。そう手放して褒められるとなんつーか」

F 「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

明久 「雄二！」

雄二 「ん？ 明久か」

明久 「僕も雄二と握手を！」

ぬおおつ！

二・・・どうして握手なのに手首を押さえるのかな・・・！」

雄二 「押さえるに・・・決まっているだろうが・・・！ フンッ！」

明久 「ぐあつ！」

智也 「えつどこに包丁が入ってたの？」

え？ やばくね」

雄

雄二「・・・・」

明久「雄二、皆で何かをやり遂げるつて、素晴らしいね」

雄二「・・・・」

明久「僕、仲間との達成感がこんなにいいものだなんて、今まで知らな関節が折れる  
ように痛いいつ！」

雄二「今、何をしようとした」

明久「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がほどに痛いいつ！」

雄二「おーい。誰かペンチを持つてきてくれー」

明久「す、ストップ！ 僕が悪かつた」

雄二「・・・・チツ・・・・ブツブツ・・・・」

智也「雄二何いってんの？」

雄二「・・・生爪・・・・」

智也「えつ怖つ！」

平賀「まさか姫路さんがFクラスだなんて・・・信じられん」

瑞希「あ、その、さつきはすみません」

平賀「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ

ルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だか

ら、作業は明日でいいか?」

明久「もちろん明日でいいよね、雄二?」

智也「はあ何いつてんの? 明久」

雄二「そうだぞ明久

クラス交換はしない」

明久「え? 何で?」

智也「Dクラスを奪う気はないから」

明久「雄二、それはどういう事? 折角普通の設備を手にいれることができたのに」

雄二「忘れたのか? 僕達の目標はあくまでもAクラスのはずだろ?」

明久「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

雄二「少しば自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

智也「雄二、中学生じやないよ、小学生だよ」

雄二「そうだつたかすまなかつたな明久」

明久「・・・人違いです」

雄二「まさか・・・本当に言われたことがあるのか・・・?」

智也「・・・ごめん」

雄二「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

平賀 「それは俺達にはありがたいが・・・。それでいいのか?」

雄二 「もちろん、条件がある」

平賀 「一応聞かせてもらおうか」

智也 「そんな大したことじゃないよ。僕らが指示を出したらあれを動かなくしてほしいんだ」

平賀 「Bクラスの室外機か」

智也 「設備を壊すと教師に睨まれる可能性あると思うけど悪い話じゃないでしょ?」

平賀 「それはこちらとしては願つてもない提案だが、なぜそんなことを?」

雄二 「次のBクラス戦に必要なんでな」

智也 「それともう1つ同盟をくんでほしいな。例えば意図的に勝負を挑むとかさ」

平賀 「・・・そうか。ではこちらはありがたくその提案を呑ませておう」

雄二 「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもういっていいぞ」

平賀 「ああ。ありがとう。お前らが勝てるよう願つて いるよ」

雄二 「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思つて いるだろ?」

平賀 「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけない。ま、社交辞令だな」

智也 「くくっ。ずいぶんといつてくれるじやん」

雄二「さて皆！今日はご苦労だつた！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰つてゆつくり休んでくれ！解散！」

明久「雄二、智也。僕らも帰ろうか」

雄二、智也「そうだな（ね）」

瑞希「あ、あのつ、坂本君つ」

雄二「ん？」

お、姫路。どうした？」

瑞希「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

雄二「おう。分かった」

智也「じゃあ先行つてるよ雄二」

雄二「おう」

明久「あつ待つてよ智也」

帰り道ーー

明久「それにしてもさ」

雄二「ん？」

明久「Dクラスとの勝負つて本当に必要だつたの？別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うけど」

雄二「ああ、そのことか

理由は他にもある。クラスの皆を試召戦争に慣れ

させる為だとか、他のプレッシャーを与えるためだとか、自信をつけて士気を上げるためだとかな」

明久「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備をてにいれなかつたのは?」

智也「それはDクラスの設備を手に入れて一部の奴らが満足して反発するかもしねないじやん。だからそれの予防と不満と言うモチベーション維持のためだよ」

明久「Aクラスに勝てるかな?」

雄二「無論だ。俺に任せておけ」

明久「・・・・ありがとう。僕のわがままの為に」

雄二「別にそんな訳じやない。試召戦争は俺がこの学校に来た目的そのものだからな」

智也「そーそー僕も面白そうだと思つてやつてんやから」

雄二「目的のためにも、明久にだつてきつちり協力してもらうからな。

とりあえず明日の補給テストで」

明久「・・・・ぐう」

智也「ゲームばかりしてないで、寝る前くらいに少しくらい勉強もなよ」

明久「はいはい。教科書くらいは読んで・・・・ん?」

あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだつた！」

雄二「・・・あほ。さつさととつてこい」

明久「んじや、先に帰つていいよ」

雄二「もちろんだ。待つているわけがないだろう」

智也「そーそー」

明久「わかっていたけど、薄情もの、チビ！」

智也「いいお節介だこのやろう」

雄二「仕方ないだろ事実なんだから」

智也「お前がでかいんだよ！」

雄二「確かにそれは認めるが、お前も十分小さいだろうなんc mだよ」

智也「・・・・160」

雄二「ほらちいせいじやねえか」

智也「くつ！ いつか勝つてやるからな！」

雄二「そんなことあるわけないだろ」

そんなことを話ながら僕たちは帰つた。

## 第五問～Dクラス戦後＆楽しいお弁当！！～

明久 「おはよー」

雄二 「おう。明久。時間ギリギリだな」

智也 「おはよー」

明久 「ん、おはよう雄二、智也

皆には何も言われなかつたの？」

雄二 「ん？ 何がだ？」

明久 「Dクラスの設備のこと」

智也 「もち、皆にもちゃんと説明したから。」

明久 「ふーん」

雄二 「それよりお前はいいのか？」

明久 「何が？」

雄二 「昨日の後始末だ」

明久 「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かつていながら行動するなんてありえないよ」

智也「雄二の始末じやなくて」

明久「いつたい何が言いたいーー」

美波「吉井つ！」

明久「ごぶあつ！」

智也「うわ、痛そ」

明久「し、島田さん、おはよう・・・」

美波「おはようじやないわよつ！」

アンタ、昨日はうちを見捨てただけじや飽きたらズ、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立てあげたわね・・・！」

おかげで彼女にしたくな女子ランキングがあがつちやつたじやない！ーーと、本来は掴みかかってるんだけど

智也「もう殴つてるのにね」

秀吉「じゃな」

美波「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

明久「うん。さつきから鼻血が止まらないんだ」

美波「いや。そうじやなくてね」

明久「ん？それじやなに？」

美波「二時間目の数学のテストだけど監督の先生、船越先生だつて」  
智也「明久ーー、テストは教室でやるんだから逃げても無駄だよー」

明久「うあー・・・・づがれだー」

智也一明久は特にだよね

明久「ほんとだよ、船越先生には近所のお兄さんを紹介したけど」

智也「その人大丈夫?」

明久「まあなんとかなるんじやない?それより疲れたね。」

秀吉 ふむ 疲れたのう

康太一・・・・(ニクニク)

雄二よし昼飯食いにいくぞ！今日はテリメンとかツ丼と炒飯とカレーにすーかな

智也「あ、そんな食うの？僕はホムティアにしようかな！」

美波「ん? 吉井達は食堂に行くのか? だから一緒にいい?」

「ああ、島田が別に構わないぞ」

美波 それじゃ 温めておひなされれ

扇入「シ?、美り今日は賛只ニ

明久「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウオーターあたりを——」

瑞希 「あ、あの。皆さん……」

明久 「うん? あ、姫路さん。一緒に学食行く?」

瑞希 「あ、いえ。え、えつと……お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

秀吉 「おお、もしや弁当かの?」

瑞希 「は、はいつ。迷惑じゃなかつたらどうぞっ」

明久 「迷惑なもんか! ね、雄二!」

雄二 「ああ、そうだな。ありがたい」

瑞希 「そうですか? よかつたあ~」

美波 「むー・・・・つ。瑞希つて、

意外と積極的なね・・・」

秀吉 「それでは、折角のご馳走じやし、こんな教室ではなくて屋上でもいくかのう」

智也 「そうやね」

雄二 「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

明久 「ん? 雄二はどこか行くの?」

雄二 「飲み物でも買つてくる。昨日頑張つてくれた礼も兼ねてな」

美波 「あ、それならウチも行く! 一人じや持ちきれないでしょ?」

雄二 「悪いな。それじや頼む」

美波 「おつけー」

雄二 「きちんと俺達の分をとつておけよ」

智也 「OK。遅いと分からんけどね」

雄二 「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行つてくる」

明久 「僕らも行こうか」

瑞希 「そうですね」

屋上——

秀吉 「天気が良くてなによりじや」

瑞希 「そうですねー」

あ、シートもあるんですよ」

明久 「気持ちいいねー」

智也 「うん」

康太 「・・・(コクコク)」

瑞希 「あの、あんまり自信はないんですけど・・・」

皆 「おおつ！」

明久 「それじや、雄二には悪いけど、先に——」

康太 「・・・(ヒヨイ)」

明久 「あつ、ずるいぞムツツリーニつ」

ムツツリーニはエビフライをつまみ取り、流れるように口に運び

康太「・・・・(パク)」

バタン ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

明久、智也、秀吉「・・・・・」

瑞希「わわっ、土屋君!？」

康太「・・・・(ムクリ、グツ)」

瑞希「あ、お口に合いましたか? 良かつたですっ

良かつたらどんどん食べて

くださいね」

あんな顔を見たら美味しくなくても食べてやろうと思うけどムツツリーニの姿が忘れられない

明久(・・・ねえ、あれどう思う?)

秀吉(・・・どう考へても演技には見えん)

智也(だいたい演技する必要ないでしょ)

明久(だよね。やばいよね)

秀吉(お主ら、身体は頑丈か?)

明久(正直胃袋には自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから)

智也（僕もたまに食べない日あるからね、やばいかもしない）

秀吉（ならば、ここはワシに任せて貰おう）

明久（そんな、危ないよ）

智也（そうだ！やめた方がいい）

秀吉（大丈夫じや。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食つてもびくともせんのじや）

智也（それはすごいな）

明久（でも・・・・）

秀吉（安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じてーー）

雄二「おう、待たせたな！へー、こりや旨そうじやないか。どれどれ？」

智也「雄二つ待て」

パク バタン——ガシヤガシヤン、ガタガタガタガタ

ジユースの缶をぶちまけて倒れた。

美波「さ、坂本!? ちよつと、どうしたの!？」

雄二が一口でだと・・・！

倒れた雄二は目でこう訴えてきた

雄二『毒を盛つたな』 と

明久『毒じやないよ、姫路さんの実力だよ』

僕も目で返事をする。こういうときはすぐ便利だ。

雄二「あ、足が・・・つってな・・・」

明久「あはは、ダツシユで階段の昇り降りしたからじゃないかな」

秀吉「うむ、そうじやな」

智也「うんうん」

美波「そうなの？坂本つてこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

明久「どこでさ島田さん。その手をついている辺りにさ」

美波「ん？何？」

明久「さつきまで虫の死骸があつたよ」

嘘だけど

美波「ええっ!?早く言つてよ！」

明久「ごめんごめん。とにかく手を洗つてきた方がいいよ」

美波「そうね。ちょっと行つてくる」

秀吉「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

智也「ほんとだね」

雄二（明久、今度はお前がいけ！）

明久（む、無理だよ！僕だつたらきつと死んじやう！）

秀吉（流石にワシもさつきの姿を見ては決意が鈍る・・・）

智也（と、とにかくどうしようか）

明久（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

秀吉（そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたそうじやが）

智也（秀吉のいうとおりだよ。明久がいきなよ）

明久（そんなことないよ！乙女心を分かつてないね！）

雄二（いや、分かつてないのはどちらかと言うとお前のことだとーー）

明久（ええい、往生際が悪い！）

瑞希「あつ！姫路さん、あれはなんだ!?」

明久（おらあつ！）

雄二（もごああつ!?)

明久「ふう、これでよし」

秀吉「・・・お主、存外鬼畜じやな」

智也「悪魔に見えたよ」

明久「ごめん、見間違いだつたよ」

瑞希 「あ、そうだったんですか」

明久 「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

秀吉 「うむ、大変いい腕じや」

智也 「すつごい美味しかったよ」

瑞希 「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか?」

明久 「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで」

瑞希 「そうですかー。嬉しいですっ」

明久 「いやいや、こちらこそありがとうございます。ね、雄二?」

雄二 「う・・・うう・・・。あ、ありがとうございます、姫路・・・」

智也 (大丈夫? 雄二)

雄二 (ああ、なんとかな)

明久 「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店がーー」

秀吉 「ああ、あの店じやな。確かに評判がいいのう」

智也 「美味しいらしいよね」

瑞希 「え? そんなお店があるんですか?」

明久 「うん。今度今日のお礼に雄二が奢ってくれるってさ」

雄二 「てめ、勝手なこと言うなっての」

瑞希 「あ、そうでした」

明久 「ん？どうしたの？」

瑞希 「実はですね—— デザートもあるんです」

明久 「ああっ！姫路さんあれはなんだ!?」

雄二 「明久！次は俺でもきっと死ぬ！」

雄二 （明久！俺を殺す気か！？）

明久 （仕方がないんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！——ここは任せたぜつ）

雄二 （馬鹿を言うな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできんものはできん

！）

明久 （この意気地無しつ！）

雄二 （そこまで言うならお前にやらせてやる！）

明久 （なつ！その構えは何？僕をどうする気！？）

雄二 （拳をキサマの鳩尾に打ち込んだあとで存分に詰め込んでくれる！歯を食いしば  
れ！）

明久 （いやあ——殺人鬼——！）

秀吉 （・・・ワシがいこう）

明久 （秀吉！？無茶だよ、死んじやうよ！）

雄二（俺のことは率先して犠牲にしたよな!?）

秀吉（大丈夫じや。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じやろう）

智也（一つはきついでしょ。半分は僕がいく！）

瑞希「どうかしましたか？」

明久「あ、いや！なんでもない！」

瑞希「あ、もしかして……」

ごめんなさいつ。スプーンを教室に忘れちゃいましたつ

取ってきますね」

智也「秀吉、頂こうか」

秀吉「うむ、そうじやな」

雄二「・・・すまん。恩に着る」

明久「ごめん。ありがとう」

智也「別にいいよ」

秀吉「そうじや。別に死ぬわけではあるまい。そう気にするでない」

明久「そ、それもそうだね！」

雄二「ああ！お前ら頼んだぞ！」

智也、秀吉「おう（うむ）。頂きます」

智也「もぐもぐ。意外と普通じゃーー」

秀吉「むぐむぐ。なんじや、意外と普通じゃとーー」

智也、秀吉「ゴばあっ！」

明久「・・・雄二」

雄二「・・・なんだ？」

明久「・・・さつきは無理矢理食べさせてゴメン」

雄二「・・・わかつてもらえたならいい」

自称『鉄の胃袋』と我がクラスの『小さな軍師』は白目で泡を吹いていた。

## 第六問～Bクラス戦開幕!!～

美波 「そういえば坂本、次の目標だけど」

雄二 「ん? 試召戦争のか?」

美波 「うん 相手はBクラスなの?」

雄二 「ああ。そうだ」

美波 「どうしてBクラスなの? 目標はAクラスなんでしょう?」

智也 「うん、確かに目標はAクラスだけど正直にいうとね……」

明久 「え? どういうこと?」

雄二 「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

智也 「あはは、」

実はAクラスは格が違うのだ。

50人のうち40人はまだBクラスより少々点数が上の普通の生徒だ。  
でも残り10人がやばい。特に代表をやつている霧島翔子さん。彼女の力は想像を絶する。奇襲が成功して彼女一人を取り囲んだとしても恐らく返り討ちに遭つてしまふかもしまう。どんな作戦を練ろうとも、代表を討ち取れない限りこちらに勝ちはな

い。

美波 「それじゃ、ウチらの最終目的はBクラスに変更つてこと?」

雄二 「いいや、そんなことはない」

明久 「雄二、さつきと言つてることが違うじゃないか」

智也 「要するにクラス単位では勝てないということ。だから少數の対決をするんじやないかな」

雄二 「ああ。一騎討ちに持ち込むつもりだ」

明久 「一騎討ちに? どうやって?」

雄二 「Bクラスを使う 試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知つているな?」

知らない。

瑞希 (吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを1つ落とされるんですよ)

明久 「設備のランクを落とされるんだよ」

雄二 「・・・まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだでは、上位クラスが負けた場合は?」

明久 「悔しい」

雄二 「ムツツリーニ、ペンチ」

明久「ややつ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがつ」

智也「えつその程度ですむの?」

瑞希「相手クラスと設備か入れ替えられちゃうんですよ」

明久「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

雄二「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

瑞希「交渉、ですか?」

智也「そ、交渉。まあ選択肢なんてないけどね」

雄二「Bクラスをやつたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備ですむからな。うまくいくだろう」

明久「ふんふん。それで?」

雄二「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といつた具合でな」

明久「なるほどねー」

秀吉「じやが、それでも問題はあるじやろう。体力としては辛いし面倒じやが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじやからな。それにーー」

明久「それに？」

秀吉「そもそも一騎討ちで勝てるじやろうか？こちらに姫路がいるということは既に知れ渡つてることじやろう？」

雄二「そのへんに関しては考えがある。心配するな　とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」

明久「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

雄二「で、明久」

明久「ん？」

雄二「今日のテストが終わつたら、Bクラスに行つて宣戦布告してこい」

明久「断る。雄二が行けばいいじやないか」

雄二「やれやれ。それならジャンケンで決めないか。」

明久「ジャンケン？　OK。乗つた。」

雄二「よし。負けた方が行く、で良いな？」

心理戦ありでいこう  
ただのジャンケンでもつまらないし、

智也「何々？面白そうな予感」

明久「わかつた。それなら、僕はグーを出すよ」

雄二「そうか。それなら俺はーーお前がグーを出さなかつたらブチ殺す

行くぞ、ジャンケン」

智也 「やばつ」

明久 「わああつ！」

パ一  
グ一

(雄三)  
(明久)

雄二 「決まりだ。行つてこい」

明久 「絶対に嫌だ！」

雄二 「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

明久 「それもある！」

雄二 「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する

なぜならBクラスは

美少年好きが多いらしい」

明久 「そつか。それなら確かに大丈夫だねつ」

雄二 「でも、お前不細工だしな・・・」

明久 「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

雄二 「5度多いぞ」

秀吉 「実質5度じやな」

智也 「だな」

明久「3人なんて嫌いだつ」

智也「とにかく、頼んだよー！」

放課後——

明久「……言い訳を聞こうか」

雄二「予想通りだ」

明久「くきいー！殺す！殺しきるーつ！」

雄二「落ち着け」

明久「ぐふあつ！」

智也「うわ、今のは入りましたね、解説の秀吉さん」

秀吉「そうじやな。今のは鳩尾におもいつきり入つていたからのう」

智也「クリーンヒットといったところでしようか」

雄二「先に帰つてるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじやな

いぞ」

明久「うう・・・腹が・・・」

智也「じやあまた明日ー」

次の日——

雄二「さて皆、総合科目テストご苦労だつた

午後はBクラスとの試召戦争に突入

する予定だが、殺る気充分か?」

F 「おおーっ」

雄二「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

F 「おおーっ」

雄二「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取つてもらう

野郎共、きつちり死んで

こい」

瑞希「が、頑張ります」

F 「うおおーっ！」

キーンコーンカーンコーン

雄二「よし、行つてこい！目指すはシステムデスクだ！」

F 「サー、イエツサー！」

戦闘場所——

F 「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ」

「生かして帰すなーっ！」

智也「世の中物騒になつたもんだね」

明久「今はそんなこといつてる暇ないよ」

Bクラス

男

総合

1943点

Fクラス

近藤吉宗

764点

智也「これはまさに桁が違う!!」  
明久「遊んでないではやくしてよ」

Bクラス

子

数学

159点

V  
S

V  
S

野中長

金田一裕

F クラス

武藤啓太

由子

B クラス

物理

69点

152点

V  
S

里井真

F クラス

君島博

77点

瑞希「お、遅れ、まし、た・・・。」

ごめ、んな、さい・・・」

B 「來たぞ！姫路瑞希だ！」

明久「姫路さん、來たばかりで悪いんだけど・・・」

瑞希「は、はい。行つて、きます」

智也「んじや、僕もいつてくる」

B「あ、長谷川先生。Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

瑞希「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

智也「長谷川先生、北山をうけます」

B「律子、私も手伝う！」

『サモン』

B「あれ？姫路さんの召喚獣つてアクセサリーなんてしてるんだね？」

瑞希「あ、はい。数学は結構解けたので・・・」

智也「じゃあ今回点数負けてるじゃんショック」

B「？結構解けると、アクセサリーをしてるの？」

「そ、それって！？」

「私たちで勝てるわけないじやない」

瑞希「じや、いきましょう」

智也「おう」

B「ちょっと待つてよ！」

「律子!とにかく避けないと」

姫路さんの召喚獣の腕輪が光を発した

キュポツ!

B 「きやあああーつ!」

「り、律子」

左腕から光線がほとばしったかと思った瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

Fクラス

数学

点 & 360 点

Bクラス

189 点 & 151 点

岩下律子&菊入真由美

V S

4  
1  
2

姫路瑞希&北山智也

智也 「勝負中に余所見とは余裕だね」

B 「えつ!?」

智也 「よいしょっ！」

B 「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！そんな馬鹿な!?」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ」

「それに北山とかいう奴も点数が高かつたぞ」

瑞希 「み、皆さん、頑張つて下さい！」

F 「やつたるでえー！」

「姫路さんサイコーッ！」

信者急増中

明久 「姫路さん、とりあえず下がつて」

瑞希 「あ、はい」

B 「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

秀吉 「明久、ワシらは教室に戻るぞ」

明久 「ん？なんで？」

秀吉 「Bクラスの代表じやが・・・」

明久 「うん」

秀吉 「あの根本らしい」

明久「根本つて、根本恭二?」

秀吉「うむ」

明久「なるほど。戻つておいた方がよさそうだね」

秀吉「雄二に何かがあるとは思えんが、念のためにの」

智也「僕も戻つとこうかな」

教室一一

明久「・・・うわ、こりや酷い」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

智也「なんか器小さいね」

教室に引き返してみると穴だらけになつた卓袱台とへし折られたシャープや消しゴ

ムだつた

明久「酷いね。これじや補給がままならない」

秀吉「うむ。地味じやが、点数に影響の出る嫌がらせじやな」

智也「まあ少しあはれるよね」

雄二「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

明久「雄二がそう言うならいいけど

それはそうと、どうして雄二是教室がこんなになつているのに気づかなかつたの?」

雄二「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」

秀吉「協定じやと？」

雄二「ああ。四時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」

智也「成る程ね」

明久「それ、承諾したの？」

雄二「そうだ」

明久「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチらとしては有利なんじやないの？」

雄二「姫路以外は、な　　あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

明久「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね」

雄二「その時はクラス全体の戦闘力より姫路や智也個人の戦闘力の方が重要になる」

明久「だから受けたの？姫路さんが万全の態勢で勝負できるようにな」

雄二「そういうのとだ。この協定は俺たちにとつてかなり都合がよい」

智也「・・・・」

秀吉「明久。智也。とりあえずワシら前線に戻るぞい。向こうでも何かされてるかもしれん」

明久 「ん。雄二、あとよろしく」

智也 「了解」

雄二 「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

明久 「なんか、まだまだ色々やつてきそうだな」

秀吉 「そうじやな。この程度で終わるとは思えん。気を引き締めた方がよさそう

じや」

智也 「だな」

秀吉 「では、くれぐれも用心するんじやぞ！」

明久 「秀吉もね！」

智也 「じやあな」

須川 「吉井！ 戻ってきたか」

明久 「待たせたね！ 戦況は？」

須川 「かなり不味いことになつてている」

明久 「え!? どうして!？」

須川 「島田が人質にとられた」

明久 「なつ!？」

智也 「とりあえず状況をみてみよう」

須川「それなら前にいこう。そこで敵は道を塞いでいる」

明久「島田さん！」

美波「よ、吉井！」

B「そこで止まれ！それ以上近づくなら、この女を補習室送りにするぞ！」

明久「総員突撃用意いーつ！」

F「隊長それでいいのか!?」

B「ま、待て、吉井！」

「こいつがどうして俺達に捕まつたと思つている？」

明久「馬鹿だから」

美波「殺すわよ」

B「こいつ、お前が怪我したって偽情報流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かつたんだよ」

明久「島田さん……」

美波「な、なによ」

明久「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、あんたは鬼か！」

美波「違うわよ！」

心配したんだからね！」  
ウチがあんたの様子を見に行つちや悪いっての!?これでも

明久 「島田さん。それ、本当?」

美波 「そ、そうよ。悪い?」

智也 「そろそろやるか サモン」

B 「へつ。やつとわかつたか。それじゃ、おとなしくーー」

パン!パン!

乾いた音が戦場に響き渡った

Bクラス

英語 W

D E A D

吉田卓夫 & 工藤信二

V S

北山

智也

F クラス

『えつ?』

4 2 0 点 → 3 8 0 点

智也 「良かつた上手くいった」

明久 「何したの? 智也」

智也「ああ、腕輪の能力を使つて武器を銃に変えて気づかれないように相手に撃ち込んだんだよ」

美波「ありがと、北山」

智也「どういたしまして、堅苦しいから智也でいいよ」

美波「そつか、ウチも美波でいいわよ、智也」

智也「そつか。」

明久「上手くいって良かつたね」

美波「そんなことより吉井、見捨てうとしたわよね？」

明久「何を言つてるの？ 実はね最初から本物の島田さんだつて分かつていたんだよ」

美波「そう　じゃあさよなら」

明久「え、なにする——」

殺されかけた

教室——

明久「……ここはどこ？」

瑞希「あ、気が付きましたか？」

心配しましたよ？ 吉井君つてば、まるで誰かにさんざん殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れていたんですから」

秀吉「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじやぞ？」

?

明久「ちょっと色々あつてね。それで試召戦争はどうなつたの？」

秀吉「今は協定通り休戦中じや。続きは明日になる」

明久「戦況は？」

雄二「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害も少なくはないがな」

明久「ハプニングはあつたけど、今のところ順調つて訳だね」

雄二「まあな」

康太「・・・・（トントン）」

雄二「お、ムツツリーニか。何か変わつたことはあつたか？」

ん？Cクラスの様子が怪しいだと？」

康太「・・・・（コクリ）」

雄二「漁夫の利を狙うつもりか。嫌らしい連中だな」

明久「雄二どうするの？」

雄二「んー、そうだなー」

Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使つて攻め込ま

せるぞ、とかいつて脅してやれば俺達に攻めこむ気もなくなるだろ」

明久「それに、僕らが勝つなんて思つてもいないだろうしね」

雄二「よし。それじゃ今から行つてくるか」

明久「そうだね」

雄二「秀吉は念のためここに残つてくれ」

秀吉「ん？なんじや？ワシは行かなくて良いのか？」

雄二「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんで

な」

秀吉「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

明久「じゃ、行こうか。ちやつと人数少なくて不安だけど」

僕たちはCクラスと協定を結ぶためにCクラスへと向かつた。

## 第七問～Bクラス戦終結＆戦後対談～

移動中

美波「吉井。あんたの返り血こびりついて洗うの大変だつたんだけど。どうしてくれんのよ」

須川「それって吉井が悪いのか？」

智也「そうだよ美波」

明久「あ、島田さん達。ちょうど良かつた。Cクラスまで付き合つてよ」

美波「んー、別にいいけど」

須川「ああ。俺も大丈夫だ」

智也「なら、僕も行こうかな」

秀吉「急がんとCクラスの代表が帰つてしまふぞい」

明久「うん。急ごう」

Cクラス――

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

小山「私だけど、何か用かしら？」

雄二「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか?」

小山「クラス間交渉? ふうん……」

雄二「ああ。不可侵条約を結びたい」

小山「不可侵条約ねえ……どうしようかしらね、根本くん?」

根本「当然却下。だつて、必要ないだろ?」

明久「なつ!? 根本君! Bクラスの君がどうしてこんなところに!」

智也「(チツやつぱいたか まあそんなのどうでもいいやどうにかしんとな)」

根本「酷いじやないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな」

明久「何を言つて——」

根本「先に協定を破つたのはそつちだからな? これはお互い様、だよな!」

B「長谷川先生! Bクラス芳野が召喚を——」

須川「させるか! Fクラス須川が受けてたつ! サモン!」

明久「僕らは協定違反なんていない! これはCクラスとFクラスの一——」

智也「そんなん無駄! あいつは『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに

決まつてるでしょ!」

根本「ま、そゆこと♪」

之

明久「屁理屈だ！」

根本「屁理屈も立派な理屈の内つてな」

雄二「明久、ここは逃げるぞ」

明久「くそっ！」

Bクラス

数学

161点

V  
S

芳野孝

Fクラス  
須川亮

41点

B「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

瑞希「はあ、ふう・・・・」

雄二「姫路、大丈夫か？」

瑞希「あ、あの、さ、先に・・・行つて、ください・・・」

明久 「雄二！」

雄二 「なんだ明久！」

明久 「ここは僕が引き受ける！雄二是姫路さんを連れて逃げてくれ！」

瑞希 「よ、吉井君、私のことは、気に、しないで」

雄二 「・・・分かった。ここはお前に任せる」

康太 「・・・（ピタツ）」

握るから

美波 「んじや、ウチは残つてもいいのかしら。隊長どの？」

明久 「・・・頼めるかな？」

美波 「はーいはーい。お任せあれっと」

康太 「・・・（グツ）」

智也 「頼むぞ。明久、美波！」

瑞希 「坂本君、吉井君は、大丈夫なんですか・・・？」

雄二 「もちろんだ。他の奴ならともかく、明久ならなんとかなる」

瑞希 「でも・・・」

智也 「大丈夫だつて絶対に」

瑞希 「そ、それは、どういう……？」

雄二 「あのバカも、伊達に『観察処分者』なんて呼ばれてないってことだ」

智也 「さ、はやく教室戻ろ？」

瑞希 「そうですね……」

教室に戻つて数十分後

明久 「あー、疲れたー」

瑞希 「よ、吉井君！ 無事だつたんですね！」

明久 「うん。このくらいなんともいだあつ！」

美波 「ふんつ」

明久 「し、島田さん。僕が何か悪いことでも」

美波 「(キツ!)」

明久 「あ。い、いや。美波」

智也 「随分仲良くなつたみたいだな？ (不機嫌)」

明久 「え？ これで？ ていうか何かあつた？」

智也 「べつになんも」

雄二 「ほう、あの智也があなあ」

秀吉 「じやな」

智也 「そこうるさい！」

雄二 「まあとにかく、こうなつた以上、Cクラスも敵だ。同盟がない以上連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

明久 「それならどうしようか？このままじや勝つてもCクラスの餌食だよ？」

秀吉 「そうじやな・・・」

雄二 「心配するな 向こうがそうくるなら、こっちにだつて考えがある」

明久 「考え方？」

雄二 「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」  
次の日――

雄二 「昨日言つていた作戦を実行する」

明久 「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

雄二 「Bクラス相手じやない。Cクラスの方だ」

明久 「あ、なるほど。それで何をすんの？」

雄二 「秀吉にこいつを着てもらう」

智也 「それってウチの制服だよね？どうやつて手に入れたの？」

秀吉 「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじや？」

雄二 「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装つてもらう

と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

秀吉「う、うむ・・・」

隣を見ると明久が悶えていた

前を見ると康太が

康太「・・・・!!（パシヤパシヤパシヤパシヤ！）」

全力でカメラのシャッターを切つている

秀吉「よし、着替え終わつたぞい。ん？皆どうした？」

雄二「さあな？俺にも良くわからん」

智也「僕は分からんこともないけどね」

秀吉「おかしな連中じやのう」

雄二「んじや、Cクラスに行くぞ」

秀吉「うむ」

智也「はーい」

明久「あ、僕も行くよ」

Cクラス前――

雄二「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

秀吉「気が進まんのう・・・」

雄二「そこを何とか頼む」

秀吉「むう・・・。仕方ないのう・・・」

雄二「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。お前なら出来る筈だ」

秀吉「はあ・・・。あまり期待せんでくれよ・・・」

明久「雄二、秀吉は大丈夫なの?別の作戦を考えておいた方が・・・」

雄二「多分大丈夫だろう」

智也「演劇部のホープだしな」

明久「心配だなあ・・・」

雄二「シツ。秀吉が教室に入るぞ」

ガラガラガラ

秀吉『静かにしなさい、この薄汚い豚ども!』

雄二「流石だな、秀吉」

明久「うん。これ以上ない挑発だね」

智也「めっちゃストレス溜まりそう」

小山『な、何よアンタ!』

秀吉『話しかけないで!豚臭いわ』

小山『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数いいからつていい気になつてるんじゃないわよ！何の用よ！』

秀吉『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校舎内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

小山『なつ！言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!?』

秀吉『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送つてあげようかと思うの』

秀吉『ちようど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！』

秀吉『これで良かつたかのう？』

雄二「ああ。素晴らしい仕事だつた」

智也「うんうん」

小山『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

雄二「作戦も上手くいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

明久「あ、うん」

智也「うーす」

戦闘開始――

秀吉「ドアと壁をうまく使うんじや！戦線を拡大させるでないぞ！」

勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

F 「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

明久 「姫路さん、左側に援護を！」

瑞希 「あ、そ、そのつ・・・！」

明久 「だああつ！ ・・・ ヴラ、ずれてますよ」

竹中先生 「つ!! 少々席を外します」

智也 「ナイス明久！ 点数が残つてる人は左側へ、消耗した人は補充しにいって」

明久 「姫路さん、どうかしたの？」

瑞希 「そ、その、なんでもないですっ」

智也 「そうは見えんよ。何があつたか話してくれん？ それ次第で作戦が変わるから」

瑞希 「ほ、本当に何でもないんです！」

F 「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

智也 「（次から次へと）数学教師は!?」

F 「Bクラス内に拉致された模様！」

智也 「拉致られた？ そんなんありかよ」

瑞希 「私が行きますっ！」

あつ・・・

明久「つ!!」

智也「なんだあの手紙?」

明久「・・・・なるほどね。そういうことか

姫路さん」

瑞希「は、はい・・・?」

明久「具合が悪そだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

瑞希「・・・・はい」

明久「じや、僕は用があるから行くね」

瑞希「あ・・・・！」

智也「おい！明久！　まあいいや。大体事情は分かつたし。

そんなことより姫

路さん」

瑞希「はい」

智也「あいつの事好きになるの少し分かつたかもしないわ」

瑞希「ふえ!?な、何を言つてるんですか!？」

智也「まあまあそれと僕はあっちの趣味は無いから安心してね」

瑞希「そんなこと分かつてます！そういう北山くんだつてどうなんですか？」

智也「うん？なにが？」

瑞希「美波ちゃんの事です」

智也「何が言いたいのかな？」

瑞希「だから要するに北山くんは美波ちゃんの事どう思つてるんですか？」

智也「あつ！ そういえば今は戦争中だつたね。はやく指示しないと じゃあねつ！」

瑞希「あれではぐらかしたつもりなんでしょうか」

数十分後——

智也「ん？ 雄二、どうしているの？」

雄二「ちょっと戦力が足りないみたいだからな本隊を連れてきた」

智也「ふーん、それで明久は？」

雄二「あーあいつか？ あいつなら今頃壁を壊そうとしてるんじゃないかな？」

智也「えつマジで？」

雄二「多分なさつきから音が聞こえるだろ」

智也「そうだね」

雄二「じゃあ俺はやることがあるんでな」

智也「了解」

根本『お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがつて暑

苦しいことこの上ないつての』

雄二『どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

根本『はあ？ギブアップするのはそつちだろ？』

雄二『無用な心配だな』

根本『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

雄二「・・・お前ら相手じや役不足だからな。休ませておくさ』

根本『けつ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

雄二『負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

根本『・・・さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやつているのか？』

雄二『さあな。人望のないお前にたいしての嫌がらせじやないのか？』

根本『けつ。いつてろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

雄二『・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！』

根本『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

雄二『あとは任せたぞ、明久』

明久『だああーーしやあーつ!!』

智也「うん？」

ドゴオツ

智也「嘘！マジで壊しちゃったよ」

根本 「ンなつ!?

明久 「くたばれ根本恭二いーつ!」

美波 「遠藤先生! Fクラス島田がーー」

B 「Bクラス山本が受けます! サモン!」

明久 「くつ! 近衛部隊か!」

根本 「は、ははつ! 驚かせやがつて! 残念だつたな! お前らの奇襲は失敗だ」

智也 「いいや、成功だ」

根本 「なに?」

ダン、ダンッ!

康太 「・・・Fクラス、土屋康太」

根本 「き、キサマ・・・!」

康太 「・・・Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

根本 「ムツツリイーニイーツ!」

康太 「サモン」

F クラス

康太

保健体育

土屋

441点

Bクラス

VS

根本恭

二

203点

康太の召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。  
今ここに、Bクラス戦は終結した。

秀吉「明久、随分と思いきつた行動にてたのう」

智也「まさか、本当にやるとは思つてなかつたよ」

明久「うう・・・。痛いよう、痛いよう・・・」

秀吉「なんとも・・・お主らしい作戦じやつたな」

明久「で、でしょ？もつとほめてもいいと思うよ？」

秀吉「後の事を何も考えず、自分の立場を追い詰める、男氣溢れる素晴らしい作戦じや

な

智也「そうだね」

明久「・・・遠回しに馬鹿つて言つてない?」

雄二「ま、それが明久の強みだからな

さて、それじや嬉し恥ずか

し戦後対談といくか。な、負け組代表?」

智也「そうだね、根本君」

根本「・・・」

雄二「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントする

ところだが、特別に免除してやらんでもない」

ざわざわ

智也「落ち着いて、皆。僕たちの目標はAクラスだよ。ここはゴールじゃないよ」

F「たしかに」

雄二「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうか  
と思う」

根本「・・・条件はなんだ」

雄二「条件?それはお前だよ、負け組代表さん」

根本「俺、だと?」

雄二「ああ。お前には散々好き勝つてやつてもらつたし、正直去年から目障りだつた  
んだよな」

智也「うんうん」

雄二「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言してこい。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

智也「うんうん」

根本「・・・それだけでいいのか？」

雄二「ああ。Bクラス代表がこれを着ていった通りに行動してくれたら見逃そう」  
そういうつて取り出したのは秀吉が着ていた女子の制服

智也「うんうん  
うん？ 何故に？」

雄二「明久が根本の制服が欲しいらしいんだ」

智也「ついにそつちの趣味にも」

明久「ついにつてなに！？ ついにつて！」

根本「ば、馬鹿なこと言うな！ この俺がそんなふざけたことを・・・」

B「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」

「任せて！ 必ずやらせるから」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

雄二 「んじや、決定だな」

根本 「くつ！よ、寄るな！変態ぐふうつ！」

B 「とりあえず黙らせました」

雄二 「お、おう。ありがとう」

智也 「着付けよろしく」

明久 「了解つ」

根本 「う、うう・・・・・」

明久 「ていつ！」

根本 「がふつ！」

明久 「うーん・・・・・。これ、どうするんだろう？」

B 「私がやつてあげるよ」

明久 「そう？ 悪いね。それじや、折角だし可愛くしてあげて」

B 「それは無理。土台が腐つてるから」

智也 「おー言うねえー」

明久 「じや、よろしく

と行つてくるね」

雄二 「おう、行つてこい」

・・・・・あつたあつた

それじやちよつ

着付け終了

智也「ゆ、雄二」

雄二「わかつてゐる」

智也、雄二「気持ち悪すぎない（か）」

根本「お前らがやらせたんだろ！」

それについても、この服やけにスカートが短いぞ！」

雄二「いいからキリキリ歩け」

根本「キサマ、よくも俺にこんなことを——」

F「無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間ががないんだぞ！」

根本「き、聞いてないぞ！」

撮影会終了後

智也「は、吐くかと思つた」

雄二「大丈夫か智也」

智也「な、なんとか」

雄二「よし、お前ら！明日はAクラス戦だ！帰るぞ」

智也「ういーす」

というわけで僕達は帰った。

## 第八問～Aクラス戦 交渉&戦闘開始～

補充テストを終えた二日後の朝

雄二 「まずは皆に礼を言いたい。回りの連中には不可能だと言わっていたにも関わらずにここまで来れたのは、他でもない皆の協力あつての事だ。感謝している」

智也 「あの人は誰だろう？」

明久 「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

雄二 「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。

ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すれば良いってもんじやないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

F 「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強だけじゃねえんだーっ！」

智也 「今更だけど、勉強も大事だよね・・・」

美波 「そうよね・・・」

雄二 「皆ありがとうございます。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたい

と考えている」

F 「どういうことだ？」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

雄二 「落ち着いてくれ。それを今から説明する やるのは当然、俺と翔子だ」

明久 「馬鹿の雄二が勝てるわけなああつ!?」

智也 「普通カツター投げるか!?」

雄二 「次は耳だ」

智也 「しかも予告してるとし、明久から離れた方が良いかも知れない」

明久 「智也！見捨てないで」

智也 「僕はこんなところでは死ねないんだ」

明久 「そんなの僕だつて同じだよ」

雄二 「おい、そこ五月蠅いぞ。まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかも知れない。

だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろう？まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかつた。

今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝

ちは揺るがない。

俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる

Fクラス「おおおーーーー!!」

雄二「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

秀吉「フィールド? 何の教科でやるつもりじゃ?」

雄二「日本史だ。ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負とする」

明久「でも、同点だつたら、きっと延長戦だよ? そうなつたら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない?」

秀吉「確かに明久の言うとおりじゃ」

雄二「おいおい、あまり俺を舐めるなよ? いくらなんでも、そこまで運に頼りきつたやり方を作戦などと言うものか」

明久「?? それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか?」

雄二「いいや。あいつなら集中なんてしてなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

秀吉「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじやろう」

雄二「ああ、すまない。つい前置きが長くなつた。俺がこのやり方をとつた理由は一つ。ある問題が出れば、あいつは確実に間違えると知つていてるからだ。　その問題は——『大化の改新』」

明久「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

雄二「いや、そんな掘り下げた問題じやない。もつと単純な問い合わせ」

秀吉「単純と一いつ何年に起きた、とかかのう？」

雄二「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ。

大化の改新が起きたのは、645年。

こんな簡単な問題は明久ですら間違えない

智也「んむ？ 明久、どうしたの？」

明久「な、何でもないよ」

智也「ふーん」

雄二「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばつて寸法だ」

智也「んー？」

雄二 「どうした智也」

智也 「いや、別に」

瑞希 「あの、坂本君」

雄二 「どうした、姫路」

瑞希 「霧島さんとは、その・・・仲が良いんですか?」

雄二 「ああ。あいつとは幼馴染みだ」

明久 「総員、狙ええつ!」

雄二 「なつ!?なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える!?

明久 「黙れ、男の敵! Aクラスの前にキサマを殺す!」

雄二 「俺が一体何をしたと!?」

智也 「相変わらずうるさいね、美波」

美波 「そうね、相変わらず馬鹿ばっかりね」

明久 「遺言はそれだけか?・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

須川 「了解です隊長」

瑞希 「あの、吉井君」

明久 「ん? なに、姫路さん」

瑞希 「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

明久 「そりや、まあ。美人だし」

瑞希 「・・・・・」

明久 「え？ なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？」

智也 「美波はいかないの？」

美波 「うん、ウチは他に気になる人ができたから」

智也 「そうなんだ」

秀吉 「まあまあ。落ち着くんじや皆の衆」

明久 「む。秀吉は憎くないの？」

秀吉 「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じやぞ？」

男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが。

むしろ、興味がある

とすれば・・・

明久 「・・・ そうだね」

瑞希 「な、なんですか？ もしかして私、何かしましたか？」

雄二 「とにかく、俺と翔子は幼馴染みで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

智也 「成る程ね」

雄二 「あいつは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。俺は

それを利用してあいつに勝つ。そうしたら俺達の机は——」

Fクラス「システムデスクだ!!」

Aクラス——

優子「一騎討ち?」

雄二「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

優子「うーん、何が目的なの」

智也「もち、僕達Fクラスの勝利だよ」

優子「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言つてわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

雄二「賢明だな……………ところでCクラスの連中との試召戦争はどうだつた?」

優子「時間はとられたけど、それだけだつたよ? 何の問題もなし」

雄二「Bクラスとやりあう気はあるか?」

優子「Bクラスつて……昨日来ていた『あの』……」

智也「そう。あれが代表をやつているクラスだよ。宣戦布告はされてないみたいだけど、どうなるかね」

優子「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね?」

雄二「知つてゐるだろ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』つてなつてゐるつてことを。規約には何の問題もない。・・・Bクラスだけじやなくて、Dクラスもな」

優子「・・・それつて脅迫？」

雄二「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

優子「うーん・・・わかつたよ。何を企んでいるか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

明久「え？ 本当？」

優子「だつて、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・」  
智也「ん？ 思わぬ収穫じやん」

優子「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎討ちじやなくて、そうだね、お互ひ五人ずつ選んで、一騎討ち五回で三回勝つた方の勝ち、つていうのなら受けてもいいよ」  
雄二「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

優子「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だつたら、

問題次第では万が一があるかもしれないし」

雄二「安心してくれ。うちからは俺が出る」

優子「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ないよ」

智也 「（別に受けてもいいんじゃない？）」

雄二 「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

優子 「ホント!? 嬉しいな♪」

雄二 「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあつても良いはずだ」

優子 「え？ うーん・・・」

翔子 「・・・受けてもいい」

明久 「うわっ！」

翔子 「・・・雄二の提案を受けてもいい」

優子 「あれ？ 代表。いいの？」

翔子 「・・・その代わり、条件がある」

智也 「条件？」

翔子 「・・・うん、一試合ごとと全体の負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

康太 「・・・（カチヤカチヤ）」

優子 「じゃ、こうしよう？ 勝負内容は五つの内三つはそつちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

智也 「（まあいいんじやないかな？）」

雄二 「（そうか、なら） 交渉成立だな」

明久 「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さんが了承していないじゃないか！」

雄二 「心配すんな。絶対に迷惑はかけない」

翔子 「・・・勝負はいつ？」

雄二 「そうだな。十時からでいいか？」

翔子 「・・・わかった」

雄二 「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

明久 「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

智也 「そーだな」

十時——in Aクラス

翔子 「・・・問題ない」

高橋 「では、両名共準備は良いですか？」

雄二 「ああ」

優子 「アタシから行くよつ」

秀吉 「ワシがやろう」

優子 「どころでさ、秀吉」

秀吉 「なんじや？ 姉上」

優子 「Cクラスの小山さんって知つてる？」

秀吉 「はて、誰じや？」

優子 「じゃーいいや。その代わり、ちよつとこつちに来てくれる？」

秀吉 「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじや姉上？」

秀吉 『姉上、勝負はーーどうしてワシの腕を掴む？』

優子 『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになつているのかなあ？』

秀吉『はつはつはつ。それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測してーーあ、姉上つちがつ・・・！』

その関節はそつちには曲がらなつ・・・!』

ガラガラガラ

優子 「秀吉は急用ができたから帰るつてさつ。代わりの人を出してくれる？」

雄二 「い、いや・・・・。ウチのーー」

智也 「僕がいく」

雄二 「そうか、分かつた」

優子 「ふーん、君名前は？」

智也 「北山智也」

優子 「まあここに来た威勢だけは褒めてあげるよ。」

智也 「そりやどーも」

高橋 「わかりました。」

明久 「ねえ雄二、智也大丈夫なの？」

雄二 「当たり前だろ、あいつを誰だと思つている」

智也、優子 「サモン!!」

A クラス

木下優子

総合科目

3383点

F クラス

北山智也

5826点

V  
S

明久 「えつ!? 智也ってあんな頭良かつたの!?」

智也 「お前馬鹿にしてんのか」

雄二 「智也は学年主席候補だぞ」

智也 「ごめんね木下さん。これも勝負だから」

優子 「点数で負けてても!!」

智也 「いや、もう終わってるんだ」

優子 「えつ!?」

A クラス

下優子

総合科目

d e a d

V  
S

木

北

山智也

F クラス

優子 「な、何をしたの?」

5 4 3 7 点

智也「腕輪の能力で武器を小刀にして、今出せる最高のスピードで間合いを詰めて渾身の一撃を叩き込んだんだ。だから、僕の点数も減つてるしね」

優子「召喚獣の動きが見えなかつた・・・」

智也「実は僕の腕輪は他の人の腕輪の能力も使えるんだ。その分点数の消費も多いけど、今回は康太の腕輪の能力を借りたんだ。とにかくこの勝負は僕達の勝ちだね」

高橋「まずは、Fクラスが一勝と」

Fクラス「しゃああーーっ!!」

智也「雄二、勝つってきたよ」

雄二「おう」

波乱のAクラス戦はまずFクラスの一勝で幕を上げた。

## 第九問～Aクラス戦終結＆戦後対談～

高橋 「では、次の方どうぞ」

佐藤 「私が出ます。科目は物理でお願いします」

雄二 「よし。頼んだぞ、明久」

明久 「え!? 僕!？」

雄二 「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

明久 「ふう・・・・。やれやれ、僕に本気を出せってこと?」

雄二 「ああ。もう隠さなくともいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せやれ」

智也 「皆に本気を見せてあげなよ」

F 「おい、吉井つて実は凄いヤツなのか?」

「いや、そんな話は聞いたことがない」

「いつものジョークだろ?」

佐藤 「吉井君、でしたか? あなた、まさか・・・」

明久 「あれ、気付いた? ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃいない」

佐藤 「それじゃ、あなたは・・・」

明久「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕——左利きな

んだ」

A  
クラス

穗

物理

389点

V  
S

吉

井明久 F クラス

62  
点

智也「うわっ佐藤さんにも点数負けてる」

雄二「お前、文系だし仕方ないんじやないか?」

智也「そうなのかな？まあそれでいいや」

智也、雄一「よし。勝負はここからだ」

明久「ちょっと待つて二人共！アンタら僕を全然信頼してなかつたでしよう！」

智也「えつ？ごめん。何て言つたか分からなかつたのでもう一度お願ひします」

雄二「信頼？何ソレ？食えんの？」

高橋「では、三人目の方どうぞ」

康太「・・・（スック）」

愛子「じゃ、僕が行こうかな」

智也「ん？あれ誰？」

雄二「転校生じやないか？」

愛子「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

智也「転入してきたんだって」

雄二「聞いていたから知つてるぞ」

高橋「教科は何にしますか？」

康太「・・・保健体育」

愛子「土屋くんだつけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

なり得意なんだよ？・・・キミとは違つて、実技で、ね♪

康太「・・・じ、実技だと！（ブツシヤアアア）」

智也「うわっ！大丈夫か！」

でも、ボクだつてか

康太 「・・・も、問題ない」

高橋 「そろそろ召喚を開始してください」

愛子 「はーい。サモンつと」

康太 「・・・くつ、サモン」

F 「なんだあの巨大な斧は!?!」

愛子 「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。それじゃ、バイバイ。ムツ

ツリーニくん」

智也 「まあ問題ないだろうな」

明久 「えつ? それってどういう?」

康太 「・・・加速」

愛子 「・・・え?」

康太 「・・・ 加速、終了」

A クラス

工藤愛子

保健体育

4  
4  
6  
点

V  
S

F クラス

土屋康太

572点

雄二 「Bクラス戦の時は出来がイマイチだつたらしいからな」

智也 「それにあの腕輪の能力やばかつたしな」

愛子 「そ、そんな・・・！この、ボクが・・・！」

高橋 「これで二対一ですね。次の方は？」

瑞希 「あ、は、はいっ。私ですっ」

久保 「それなら、僕が相手しよう」

雄二 「やはり来たな、学年次席」

智也 「当たり前だわな」

雄二 「ここが一番の心配どころだ」

高橋 「科目はどうしますか？」

瑞希 「総合科目でお願いします」

智也 「いいの？」

瑞希 「ええ、私には特別得意教科がないので」

智也「そつかー

久保、瑞希「サモン!!」

Aクラス

久保利光

総合科目

3997点

V S

Fクラス

姫路瑞希

4409点

A「マ、マジか!?」

「いつの間にこんな実力を!?」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ・・・！」

久保「ぐつ・・・！姫路さん、どうやつてそんなに強くなつたんだ・・・？」

瑞希「・・・私、このクラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命な皆のいる、

F

クラス」

久保「Fクラスが好き?」

瑞希「はい。だから、頑張れるんです」

久保「だが、負けるわけにはいかない！」

瑞希——やあああ——っ！

久保くんの召喚獣の鎌が姫路さんの召喚獣の首を狩りにいくとそれを予測していた姫路さんはそれを避け腕輪の能力を使つた

久保「こうなつたら」

久保くんの召喚獣の腕輪が光った

見たところ久保くんの召喚獣の腕輪の能力は鎌鼬のようだ

そして姫路さんの熱線が久保くんの召喚巻に当たった瞬間に久保くんの鎌鼬が姫路

さんの召喚獣の身体を切り裂いた

A  
クラス

久保和光

總合科目

d  
e  
a  
d

F クラス

姫路瑞希

d e a d

V  
S

高橋 「二対一対一分けです」

瑞希 「すいません」

雄二 「気にするな。負けないだけました」

智也 「そうだよ、落ち込まないで」

瑞希 「ありがとうございます」

高橋 「最後の一人、どうぞ」

翔子 「・・・・はい」

雄二 「俺の出番だな」

高橋 「教科はどうしますか？」

雄二 「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ・・・・！

A 「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル。満点確実じやないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ・・・」

高橋 「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待つていてください」

明久 「雄二、あとは任せたよ」

雄二 「ああ。任せられた」

康太 「・・・・・(ビツ)」

雄二 「お前の力には随分助けられた。感謝している」

康太 「・・・・・(フツ)」

瑞希 「坂本君、のこと、教えてくれてありがとうございました」

雄二 「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

瑞希 「はいっ」

智也 「まあ結果はどうであれと構わんからね」

雄二 「それを聞いて安心した」

高橋 「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かつてください」

翔子 「・・・・・はい」

雄二「じゃ、行つてくるか」

瑞希「はい。行つてらっしゃい。坂本君」

雄二「ああ。」

高橋「皆さんはここでモニターを見ていてください。  
『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。  
不正行為等は即失格になります。いいですか?』

翔子『・・・・はい』

雄二『わかつてているさ』

高橋『では、始めてください』

瑞希「吉井君、いよいよですね・・・・」

明久「そうだね。いよいよだね」

瑞希「これであの問題がなかつたら坂本君は・・・・」

明久「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」

瑞希「はい。もし出ていたら」

明久「うん」

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい》

（ ） 年 平城京に遷都

( ) 年  
平安京に遷都

( ) 年  
鎌倉幕府設立

( ) 年  
大化の改新

明久 「あ・・・・！」

瑞希 「よ、吉井君つ」

明久 「うん」

瑞希 「これで、私たちつ・・・！」

明久 「うん！これで僕達の卓袱台が」

Fクラス 「システムデスクに！」

明久 「最下位層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

Fクラス 「うおおおおおっ！」

『日本史勝負 限定テスト 100点満点』

Aクラス

霧島翔子 97点

Fクラス

坂本雄二

0点

※無記名の為零点

高橋 「二対二対一分けで同点です

V  
S

ちなみに、無記名じやなかつた場合は百点でした」

智也「よーし、とりあえず戦つた人同士で集まつてお願いしよーかー」

智也 side

智也「ねえねえ木下さん」

優子「なによ」

智也「お願のことなんだけど」

優子「何をお願いするの」

智也「木下だとさー秀吉と被つちやうからさー。優子でもいいかな?」

優子「あーそんなこと全然いいわよ」

智也「なら、僕の事も智也つて呼んでもよ優子」

優子「そう? ジヤあよろしくね智也」

明久 side

佐藤「あの、お願いのことなんですが・・・」

明久「うん、何かな」

佐藤「特別ないので・・・そうですね勉強を頑張つてください」

明久「う・・・分かったよ」

康太 side

愛子「どんなお願ひでもボクは構わないよ、ムツツリーニくん?」

康太「……俺の事を名前でよんではほしい」

愛子「ならボクの事も名前で呼んでくれないと無理だよ」

康太「……分かった。愛子」

愛子「……（//＼△／＼＼＼）」

康太「……どうしたんだ?」

愛子「あつううん何でもないよ、康太!」

康太「……そうか」

雄二 side

翔子「……雄二、私と付き合つて」

雄二「もう少し待つてくれ、俺の方で答えを出したいんだ」

翔子「……わかつた」

皆集合

雄二「良し、終わつたか皆」

明久達「うん」

雄二「よし、じゃあ一一」

西村「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

智也「ん？ 西村先生。何か用ですか？」

西村「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

智也「は？」

西村「確かにお前らはよくやつた。だが『学力』は人生を渡つていく上では大切な武器だ。そこで、学園長に頼んで福原先生から俺に担任を変わつてもらつた。これから一年間、死に物狂いで勉強できるぞ」

Fクラス「なにいっ!?」

西村「吉井。お前と坂本と北山は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の『観察処分者』とA級戦犯だからな」

智也「僕はどうして!?」

西村「お前の力はAクラス上位並みだと思つていた。それがまさか学年主席レベルだつたとはな。つまり実力を隠していたということだよな？」

智也「まあそうともいますね・・・」

明久「そはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐつて、今まで通りの楽しい学園生活をすごしてみせます！」

智也「そーだそーだ!!」

西村「・・・お前らには悔いを改めるという発想はないのか

とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう

智也「明日からか・・・美波」

美波「ん? なに智也?」

智也「今日これからちよつと遊ばない?」

美波「うーん、いいわよ」

智也「ほんと!? ありがとう」

こうして僕達、Aクラス戦は終わった。

## 閑話休題

## 僕と雄二の約束＆王様ゲーム

それは振り分け試験三ヶ月前のことだつた。

雄二「智也、ちよつといいか？」

智也「別にいいよ」

雄二「ここじやなんだし屋上にでも行かないか？」

智也「りょー」

屋上ーー

智也「それで話つてなに？」

雄二「俺は二年になつたらFクラス代表になつてAクラスに下克上をしたいんだ」

智也「ん？どうして？」

雄二「世の中学力全てじやないつて証明したくてな」

智也「ふーん、そんで？」

雄二「その下克上、お前も参加してみないか？」

智也「うーん、それって勝てる勝負なの？」

雄二 「お前がいてくれたら勝てる」

智也 「頼られるつてのは悪い気はしないし、下克上つてのは面白そ.udけど」

雄二 「けど？」

智也 「こちらからも条件があるよ」

雄二 「・・・なんだ」

智也 「それは・・・雄二の成績をAクラス上位並みにしてほしいんだよね」

雄二 「どうしてだ？」

智也 「確かに試合戦争つて代表が負けたら終わりだつたよね？」

雄二 「ああ」

智也 「戦つてる途中に負けましたつて嫌だからね」

雄二 「ははつお前らしいな。分かつたその条件をのもう」

智也 「まあ勉強なら教えてあげるし」

雄二 「ありがとう」

智也 「あーあともう一つ。霧島さんと仲良くしてね」

雄二 「お、お前何を言つて」

智也 「照れちやつてどこにも需要はないよ」

雄二 「そんなん分かつてるわ!!」

智也 「まあ、とにかく頼むよ」

雄二 「仕方ないな。分かつたよ」

智也 「交渉成立だね。それじゃあ」

雄二 「ああ。またな」

回想終了

まさかFクラスにきて下克上をやることになるなんて思つてもなかつた。でも、こんな面白いことに誘つてくれた雄二には感謝しないとな。

雄二 「おーい、智也Aクラス戦いくぞ」

智也 「はーい」

さてと、Aクラス戦頑張りますか

ここからは王様ゲームです。

やつてているのは

雄二

明久

智也

秀吉

康太  
美波

瑞希

愛子

翔子にします。

雄二、智也「王様ゲームっ!!」

明久達「いえーーっ!!」

雄二「さあ智也ルール説明をしてくれ」

智也「はーい、ルールは簡単。ここに1~8と書かれた紙と『王様』と書かれたカードがあります。」

そしてその王様になつた人は1~8番の人を選択して命令をすることができます。  
そしてその王様の命令はーー」

明久達「絶対っ!!」

雄二「良し、それでは始めよう 皆、紙を持つたな? 良し、せーの」

全員「王様だーれだ!!」

秀吉「んむ、ワシじやな そうじやのう一番が七番にほつぺにキスをするのじゃ!!」

智也「嘘だろっ! 秀吉! 『七番』」

美波 「そうよ！木下！『一番』」

雄二 「おいおい、お前ら王様の命令はなんだつたつけ？」  
明久 「そうだよ、智也、美波（ニヤニヤ）」

智也、美波「くつ！」

美波 「そ、それじゃあ智也行くね」

智也「お、おう」

チユツ

雄二「どうしたんだ、二人共? (ニヤニヤ)」

智也一ぜ、絶対復讐してやろうな。美波」

美波 そ、そうねやり返してやりましょう」

智也一良し！次いくよ！世一の上

全員一様だーれだ!!

雄二　ふつ俺だな。  
　　そうだな。  
五番と三番は船越女史に告つてこい』

明久一ふざけるなー!! 雄一いいー!! 『五番』

康太一  
.....万死に値する三番】

智也 「何言つてゐんだらうね、美波」

美波 「そうね、だつて王様の命令は・・・」

明久、康太「・・・・・絶対!!

うわああーー

數十分後

明久、康太一はあはあ

明久  
危ないところだつた・・・

智也「無事だつたのか」

明久「く、くそ。いくよ！せーの」

全員「王様だーれだ!!」

愛子 「んふふ、ボクだねー それじゃ

一番は六番に抱きつく!』

智也「一番だれ？」

翔子「…………一番は私一

雄二 「……(シユタツ)」

明久、康太、智也 「逃がすかあー！」

惟二「共、唯廿！」

謂也」「々々、霧島々

羽二「アリバニ」

第三章

ギュッ

智也 「良し、そのままいくよー、せーの」

全員 「王様だーれだ!!」

瑞希 「わ、私です。そうですね、八番と五番の人に私お手製のクッキーをあげちゃいますっ」

明久、秀吉 「な、なんだと（じやと）」

瑞希 「吉井君と木下君ですかっはい、どうぞっ」

明久 「あ、ありがとう・・・後で食べるよ」

秀吉 「わ、ワシもそうしようかの」

愛子 「じやあ次いくよ！せーの」

全員 「王様だーれだ!!」

智也 「きたー!!

良し、それじや二番が四番の手にキスで！ 確か明久は四番で雄二

が二番の筈だ！ これで社会的に抹殺だ！」

明久 「う、嘘でしょ！」

智也 「くくつざまあみろ」

雄二 「なあ智也」

智也 「何、雄二命令は変更しないよ」

雄二  
いや、それがな俺三番なんだ」

智也「えつ! ジやあ一番つて」

瑞希一わ、私です！」

智也 まじか、僕としたことが

瑞希「そ、それじやいきますね。吉井君」

明久「う、うん」

チユツ

明久、瑞希

智也 「なに照れてんだよー」

「そうよ！ウチらはほつぺだつたんだからね！」

秀吉「そろそろ、時間も時間じゃし次で最後にしようかの」

明久「そうだね、せーの一

金匱「正義」一卷

「うつウチだ、どうも、留也が夏隼、ここへ来た。どうもここへ来たは名前

三才圖會

卷之三

雄三「別にいいんじやないか？それと翔子、いい加減離れてくれ」

翔子「……わかつた」

智也 「良し、じやあ名前で呼びあおつか」  
雄二 「つーわけでこれで今日はお開きだ、よし帰るぞ」  
全員 「はーい」

## 僕と美波の初デート？

智也 side

今日はAクラス戦後に約束した美波とのデート？の日。めっちゃ楽しみ。今回でどうにか距離を縮めたい。今日の予定は・・・とあの噴水の前で集合してからぶらぶらするんだよね。もう予定がどうか分かんないけど・・・そろそろ時間だ、じゃあいくか。

智也「行つてきまーす」

噴水前――

美波「待つた？」

智也「ううん、今着いたとこ」

美波「そつか、へえ結構似合つてるじゃん」

智也「そりやどうも。美波も似合つとるよ」

今日の服はデニムに良くある英語がかいてあるTシャツです。ファッショニ興味がないから何時間も悩んだというのは、裏話です。

そして美波の格好はミニスカートにTシャツっていう普通の格好だけどもとが良いのでとても可愛い。

美波 「ありがと それで今日はどうするの?」

智也 「そうだねー どうしようつか、美波は何か行きたいとこある?」

美波 「ウチ?ウチはね、映画見たいし、スイーツも食べたいかな」

智也 「じゃあそれいこつか」

美波 「そう?」

智也 「うん そうと決まれば はいっ」

美波 「えつ!」

智也 「はいっ」

美波 「う、うん」

智也 「じやあいこつか」

美波 「うん」

どさくさに紛れて手握っちゃったけど少し照れるかな  
智也 「じやあまでは映画行く?」

美波 「そうね」

映画館」

智也 「どれ見る?」

美波 「うーんあれとかどう?」

美波が指したのは恋愛もの？えつと題名は『○をかける少女』？

智也 「あれ、まだやつてたんだね」

美波 「うん、久しぶりに見たくて」

智也 「じゃああれにしよつかつ」

美波 「うん、大人一人いくら？」

智也 「いいよいいよ、僕が払うつて」

美波 「いいわよ、そんなの悪いから」

智也 「こつちから誘つてるんだから良いつて、それに普段からお金使うのつて購買ぐ  
らいだから」

美波 「そう？ ジヤあお願ひしようかな」

智也 「了解ですっじやあ行つてくるね

しますっ」

店員 「はい、大人二枚分ですね？ 3000円です。」

智也 「どうぞ」

店員 「席はどこら辺にしますか？」

智也 「中央の席ありますか？」

店員 「はい、ありますよ ちなみに今日は彼女さんと来てるんですか？」

智也 「見てたんですか?まだ彼女じゃないです これから頑張る予定です」

店員 「そうですか、頑張つてくださいね」

智也 「ありがとうございます」

買つてきたよー」

美波 「ありがと」

智也 「良いいってば、中央の席にしたけど良かつた?」

美波 「うん、良いよ」

智也 「そりや良かった。ポップコーンとか食べる?」

美波 「うーん食べようかな」

智也 「なに味が良い?ちなみに僕はキャラメル派です」

美波 「ウチは苺派かな」

智也 「じゃあこうしよう ハーフ&ハーフでキャラメルと苺を頼もう」

美波 「そうね 今度はウチが払うわよ」

智也 「良いいってその代わり手繫いでな」

美波 「う、うん」

映画見終わつたーー

智也 「面白かつたねー」

美波 「そうね でもアンタちゃんと見てた?」

智也 「見てたよ 特にガーロットが良かつたよね」

美波 「それ、歌ね」

智也 「そうともいえますね」

美波 「そうしかいえないわ」

智也 「まあまあ ジヤあスイーツを食べにいきましょう

どこかいいお店知ってる?

美波 「うーん、ラ・ペデイスとかどう?」

智也 「あー文月学園生徒御用達のお店だつけ? 評判良いしそこでいいんじゃない?」

美波 「じゃあそこにしましようか」

智也 「うんつ」

ラ・ペデイスーー

カラソカラソ

店員 「いらっしゃいませう何名様ですか?」

智也 「二名ですけど空いてますか?」

店員 「はい、二名様ですね。こちらへどうぞっ」

智也 「なんか、元気一杯の店員さんだつたね」

美波 「そうね」

智也 「何にする?」

美波 「うーん、どれにしようかな」

智也 「どれにするの?」

智也 「僕は勿論シュークリームです」

美波 「そつか、じゃあウチはこのチョコバナナクレープにしようかな」

智也 「おつけー すいませーん」

店員 「はい、ご注文はお決まりでしようか?」

智也 「はい、このシュークリームとチョコバナナクレープを一つずつお願ひします」

店員 「はい、畏まりました それでは少々お待ちください」

美波 「そういうえばアンタあんなに頭良かつたのね」

智也 「まあ、一応ね 美波だつて問題さえ読めれば点数取れるんだから」

美波 「それが読めないから困つてるのでよ」

智也 「なら、僕が教えてあげるよ。

国語系とか得意だし」

美波 「じゃあお願ひしようかな」

智也 「必ず三桁にさせてみせましょう」

美波 「頼りにしてるわよ、先生」

智也 「おう」

店員 「お待たせしました、シュークリームとチョコバナナクレープです」

智也 「ありがとうございます」

良し、じやあ食べよつか」

美波 「そうね」

智也、美波 「(パクッ モグモグ)」

智也 「さすが評判良いだけあって美味しいね」

美波 「そうね、甘過ぎない所もいいわね」

智也 「そうだね、甘き控えめで食べ易いし」

美波 「一口食べる?」

智也 「良いの?ありがとう」

美波 「はい、あーん」

智也 「えつ」

美波 「いらぬいの?」

智也 「ううん、貰うよ

あーん(モグモグ)

どいい感じかも」

ほんとだね甘過ぎないしちょう

美波 「でしょ?」

智也 「んつ」

美波 「うん?」

智也 「お返します。はい、あーん」

美波 「あ、あーん（モグモグ） うんつ美味しい」

智也 「（ニコニコ）」

美波 「なによ? 人の顔見て笑つて」

智也 「ごめんごめん、ただ可愛いなと思つてさ」

美波 「つつ！」

智也 「どうしたの?」

美波 「何でもないわ」

智也 「そつか ちなみにだけどさこれつてデート?」

美波 「えつ!? なによいきなり」

智也 「いや、ふと思つたからさ」

美波 「うーんそうねー」

智也 「ちなみに僕はデートだと思つてるよ」

美波 「アンタって意外と大胆ね」

智也 「そう？」

美波 「そうよ、ふと思つてもそんなこという？」

智也 「そうなのかなー」

美波 「そうよ」

智也 「それで答えは？」

美波 「教えてあーげないつ」

智也 「むう、意地悪」

美波 「ふふつ、じやあお会計しましょうか」

智也 「はーい」

店員 「1500円です」

美波 「はーい、これでちようどかな」

店員 「はい、ちょうど1500円ありますね」

智也 「あつ！知らない間に払われてた」

美波 「いいのいいの」

智也 「ごちそうさまです」

美波 「いえいえ」

智也 「もう、こんな時間かそろそろ帰る？」

美波「そうね、帰りましようか」

智也「送つてこつか?」

美波「大丈夫よ 今日は楽しかったわ  
ありがとう」

智也「こちらこそ、楽しかったです  
またいこうねつ」

美波「そうね、それじやあ」

智也「うん、ばいばい」

帰ろつと

美波「智也!」

智也「うん?」

美波「今日は本当にありがとう」

そういうった時の美波の笑顔は本当に綺麗だつた

智也「おう」

今日は本当に楽しかつたな

僕としては頑張つたし、これからも頑張つてかないよ

それにしてもあるの笑顔本当に綺麗だつたな

ますます好きになつたかも知れない

# 清涼祭

## 第十問～準備中　　清涼祭①～

雄二「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが——」

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

瑞希「明久君。雄二君つて学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

明久「直接聞いたわけじやないから分からぬいけど、楽しみにしているつてことはなさそうだね。興味があるのならもつと率先して動いてるはずだから」

瑞希「そなんですか・・・。寂しいです・・・。明久君も興味がないですか？」

明久「うん、どうだろ？別にそこまで何かをやりたいってわけでもないしなあ」

瑞希「私は・・・明久君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」

明久「ほえ？」

瑞希「その、明久君は知つてますか・・・？うちの学園祭ではとつても幸せなカップルが出来やすいって噂が一ヶホケホツ」

明久 「大丈夫?」

瑞希 「は、はい。すいません・・・」

明久 「そのうち、なんとかしないとなあ・・・」

雄二 「んじゃ、学園祭実行委員は美波ということでいいか?」

美波 「え?ウチがやるの?ううん、・・・、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

明久 「雄二。実行委員なら、美波より瑞希ちゃんの方が適任なんじやないの?」

瑞希 「え? 私ですか?」

智也 「瑞希には無理でしよう。きっと全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになっちゃうと思うんだよね」

美波 「それには、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

明久 「え? そうなの?」

瑞希 「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

智也 「僕もでようかなー」

明久 「学校の宣伝みたいな行事なのに。三人とも物好きだなあ」

美波 「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希つてば、お父さんを見返したいって  
いつてきかないんだから」

明久「お父さんを見返す？」

美波「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！

許せません！』つて怒ってるの」

智也「珍しいやん、怒るなんて」

瑞希「だつて、皆のこと何もわかつていないくせに、Fクラスつていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せませんっ」

明久「・・・」

美波「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうつてワケ」

雄二「四人とも。こっちの話を続けて良いか？」

明久「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だつたよね？」

美波「だからウチは召喚大会に出るつて言つてるのに」

雄二「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろ？」

美波「んー・・・。そうね、その副実行委員次第でやつても良いけど・・・」

雄二「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から美波が二人を選んで決選投票をしたらいいだろう」

F「吉井が適任だと思う」

「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

「北山にやつてもらおう」

「ここは須川にやつてもらつた方が」

秀吉 「ワシは明久が適任じやと思うがの」

智也 「僕もそう思うかな」

明久 「秀吉に智也。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな／なんて」

智也 「そんなの誰だつて同じだよ」

秀吉 「ならば適任の者にやつてもらつた方が良いじやろう？」

明久 「むう・・・・。それはそうだけど・・・・」

雄二 「よし。じやあ美波。今拳がつた連中から二人を選んでくれ」

美波 「そうねー。それじや・・・・」

『候補①・・・吉井』

『候補②・・・明久』

雄二 「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

智也 「明久がやるのか。なら僕は少し寝るよ」

秀吉 「ーーのじや、ーーるのじや、

起きるのじや」

智也 「んむ、ああおはよう秀吉 どうしたの？」

秀吉 「おはようじや。今出し物が決まつたところじや」

智也 「何になつたの？」

秀吉 「中華喫茶『ヨーロピアン』じや」

智也 「中華喫茶なんだよね？」

秀吉 「うむ」

須川 「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

康太 「・・・・（スクツ）」

明久 「康太、料理なんてできるの？」

康太 「・・・・紳士のたしなみ」

美波 「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まつて！」

瑞希 「それじや、私は厨房班にーー」

明久 「ダメだ瑞希ちゃん！ キミはホール班じゃないと！」

智也 「ナイスプレイ』

秀吉 「明久、グツジヨブじや」

康太『・・・・！（コクコク！）』

瑞希「え？ 明久君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

明久「あ、えーっと、ほら、瑞希ちゃんは可愛いから。ホールでお客様に接した方がお店として利益がねつ」

瑞希「か、可愛いだなんて・・・。

明久君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねつ♪

智也「美波はどうするの？」

美波「ウチ？ ウチはねホールにしようかな」

智也「じゃあ僕もホールにしよ」

帰りのH.R後

美波「ねえ、皆ちよつといい？」

智也「いいよ」

美波「あのね、皆に相談なんだけど」

明久「僕で良ければ聞かせてもらうよ」

美波「うん。ありがと。多分、アキ達に言うのが一番だと思うんだけど——そのやつ

ぱり雄二をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

智也「難しいと思うよ。あいつは興味ないことは徹底的に無関心だからね」

美波「でも、アキが頼めばきっと働いてくれるよね？」

明久「え？ 別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

美波「ううん、そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だつてーーー！」

明久「そりや確かに、よくつるんでいるけど、だからといつて別に」

美波「だつてアンタ達、愛し合つてるんでしよう？」

明久「もう僕お婿にいけないっ！」

智也「呼ばれなくて良かつた本当に」

明久「誰が雄二なんかと！ だつたら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

秀吉「・・・あ、明久？ そ、その、

お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思ふのじや。その、ホラ。歳の差とか・・・」

明久「ひ、秀吉！ 違うんだ！ ものすごい誤解だよ！ さつきのはただの言葉のアヤで！ それと、僕らの間にある障害は決して歳の差じやないと思う！」

美波「それじや、雄二は動いてくれないつてこと？」

明久「え？ あ、うん。そういうことになるかな」

美波「なんとかできないの？ このままじや喫茶店が失敗に終わるような・・・」

秀吉「ところで、お主らは何の話をしておるのじゃ？ そんなに思い詰めた顔をすると  
は、随分と深刻な話のようじやが」

明久「深刻つて程じやないんだけど、喫茶店の経営とクラスの設備の話でーー」

美波「アキ、そうじやないの。本当に深刻な話なのよ・・・」

明久「え？ どういうこと？」

美波「本人には誰にも言わないので欲しつて言われてたんだけど、事情が事情だ  
し・・・。けど、一応秘密の話だからね？」

明久「う、うん。わかった」

美波「実は、瑞希なんだけど」

明久「瑞希ちゃん？ 瑞希ちゃんがどうかしたの？」

美波「あの子、転校するかもしれないの」

明久「ほえ？」

智也「なるほどね」

秀吉「む。マズイ。明久が処理落ちしかけとるぞ」

美波「このバカ！ 不測の事態に弱いんだから！」

智也「おーいつ」

秀吉「明久、目を覚ますのじゃ！」

明久「秀吉・・・モヒカンになつた僕でも、好きでいてくれるかい・・・？」  
 美波「・・・どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら」

秀吉「ある意味、稀有な才能かもしれんのう」

明久「美波！瑞希ちゃんが転校つて、どういうことさ！」

美波「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

秀吉「美波よ。その瑞希の転校と、さつきの話が全然繋がらんのじやが」

智也「いや、そうでもないと思う。

きつと理由が『Fクラスの環境』だと思ふから

明久「そうなの美波？」

美波「うん」

明久「つてことは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて——」

美波「そうね。純粹に設備の問題つてことになるわ それに瑞希は、身体も弱いから

ら・・・」

明久「そうだよね。それが一番マズイよね・・・」

秀吉「なるほどのう。じやから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじやな」

美波「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やつぱり設備をどうにかしないと」

智也「そういうことなら手伝つてあげたいんだけど・・・」

明久「けど？」

智也「あの集団をまとめる能力は僕にはないと思うんだよね・・・だからやつぱり雄二をよばないとね」

美波「そつか・・・」

明久「なら、雄二と連絡を取らないとね」

智也「僕がかけるよ。確かに雄二是Aクラスにいると思うし明久がかけると何かしらめんどいことになるからね」

美波「そうね」

P r r r r r

雄二『——もしもし』

智也「雄二？話があるから来てくんない？」

雄二『別に構わないが何があつたんだ？』

智也「それはこっちで話した方が楽だから」

雄二『分かった。今から向かおう』

智也「はーい。お願ひしまーす」

ブー、ブー

美波「雄二はなんて言つてた?」

智也「来てくれるつてさ」

美波「じゃあちよつと待ちましょうか」

数分後——

雄二「智也話つてなんだ?」

智也「実は——」

説明中——

智也「——つてことなんだ」

雄二「そうか。瑞希の転校か・・・

そうなると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

智也「そなんだよね」

明久「不十分?どうして?」

雄二「瑞希の父親が転校を勧めた要因は恐らく二つ

これは健康に害のある学習環境という面だ」

智也「これは教室全体が問題という意味ね」

一つ目は、老朽化した教室。

雄二「喫茶店の利益程度じゃ改善は難しい。教室自体の改修ともなると、学校側の協力が不可欠だ」

智也「そんで二つ目はレベルの低いクラスメイト。要するに瑞希の成長を促すことのできない学習環境ってこと そしてもし、三つ目をあげるなら卓袱台に座布団という貧相な設備 普通の高校生活じや出会えないものだからね」

明久「参つたね。随分と問題だらけだ」

秀吉「そうじやな。三つ目ならともかく、一つ目と二つ目は難しいのう」

雄二「それでもないさ。二つ目の方は既に瑞希と美波で対策を練つてあるんだろう？」

美波「この前、瑞希に頼まれちゃつたからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だつたけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

雄二「翔子が参加するようだと優勝は厳しいが、アイツはこういつた行事には無関心だしな。瑞希と美波の優勝は充分ありえるだろう」

明久「そうだね。二人ならきつとなんとかなるよ」

秀吉「瑞希と美波が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるじゃろうし、一石二鳥じやな」

美波「で、雄二。それはそうと、一つ目の問題はどうするの？」

雄二「どうするも何も、学園長に直訴したらいいいだけだろ？」

明久「それだけ？僕らが学園長に言つたくらいで何とかしてくれるかな？」

雄二「あのはな。ここは曲りなりにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるから、改善要求は当然の権利だ」

智也「明久、雄二行つてらっしやい」

明久「智也は行かないの？」

智也「僕はそういうの得意じゃないから」

雄二「そうか。ならお前らは学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人を見かけたら俺たちは帰つたといつておいてくれ」

秀吉「うむ。了解じや」

美波「アキ、しつかりやつてきなさいよ」

明久「オツケー。任せといてよ」

雄二と明久は学園長室を目指して教室を後にした。

智也「なあなあ秀吉」

秀吉「なんじや？」

智也「召喚大会出ない？」

秀吉「別に構わんがどうしたのじや？」

智也「もとから出ようと思つててさ

それに瑞希が転校するかもしけないならFクラスとして出ときたいじゃん」

秀吉「分かったのじや」

智也「ありがと

それじや雄二達が帰つてくるまで学園祭の準備計画練ろうか」

美波「そうね」

僕達は雄二達が帰つてくるまで学園祭の準備計画を練ることにした。

# 第十一問～準備中 清涼祭②～

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

雄二「どうした、明久」

明久「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

雄二「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さつさと中に入るぞ」

明久、雄二「失礼しまーす！」

藤堂「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

竹原「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

藤堂「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきやいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

竹原「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

藤堂「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

竹原「・・・ですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう それでは、この場は失礼させて頂きます」

藤堂「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

雄二「今日は学園長にお話があつてきました」

藤堂「私は今それどころじゃないんですね。学園の経営に関するこことなら教頭の竹原に言ひな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてもんだ。覚えておきな」

雄二「失礼しました。俺は二年Fクラス代表の坂本雄二。それでこつちがーー二年生を代表するバカです」

藤堂「ほう・・・・。そうかい。アンタ達がFクラスの坂本と吉井かい」

明久「ちよつと待つて学園長！僕はまだ名前を言つてませんよね!?」

藤堂「気が変わつたよ。話を聞いてやろうじやないか、その代わり北山を呼びな」

明久「えつ智也を？」

雄二「分かりました」

P r r r r r

智也『もしもし』

雄二「智也か、学園長室に来てくれ」

智也『えつ何で？』

雄二「学園長にお前を呼べって言われてな」  
智也『ふーん、分かつた。今から行くわ』

プレー、プレー

明久「なんて?」

雄二「今から来るつてさ」

数分後

コンコン

藤堂「入りな」

智也「はい」

ガチャ

雄二「来たか」

智也「それでなに?」

雄二「これで良いですか? 学園長」

藤堂「ああ。さつさと話しな、ウスノロ」

雄二「Fクラスの設備について改善を要求しにきました」

藤堂「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

雄二「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が

吹き込んでくるような酷い状態です」

智也 「（ちょっと！言葉がおかしいよ！）」

雄二 「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

智也 「（人の話を聞いてましたか！）」

雄二 「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さつさと直せクソババア、というワケです」

智也 「最悪だあーーっ！」

明久 「あの、学園長……？」

藤堂 「（……ふむ、丁度良いタイミングさね……）よしよし。お前達の言いたいことはよくわかつた」

明久 「え？ それじや、直してもらえるんですね！」

藤堂 「却下だね」

智也 「ですよね」

明久 「雄二、このババアをコンクリ詰めて捨ててこよう」

雄二 「……明久。もう少し態度に気を遣え」

智也 「あの……よろしければ理由を聞かせて貰えますか……？」

雄二「まつたく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、バ  
バア」

明久「そうですね。教えてください、ババア」

智也「ほんと、やめてほしいな・・・」

藤堂「・・・お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思つて『いるのかい?』」

智也「すいません」

藤堂「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜  
かすんじゃないよ、なまつちろいガキども」

明久「それは困ります! そうなると、僕らはともかく身体の弱い子倒れて」

藤堂「ーーと、いつもなら言つているんだけどね 可愛い生徒の頼みだ。こちらの

頼みも聞くなら、相談に乗つてやろうじやないか」

雄二「・・・・・」

智也「へえ」

明久「その条件つて何ですか?」

藤堂「清涼祭で行われる召喚大会は知つてるかい?」

明久「え? 優勝商品?」

藤堂「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副賞には『如

月ハイランド プレオーブンプレミアムペアチケット』が用意してあるのさ」

明久「はあ・・・。それと交渉条件に何の関係が」

藤堂「話は最後まで聞きな。慌てるなんとかは貴いが少ないって言葉を知らないのかい？ この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

明久「回収？ それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか」

藤堂「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行つた正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

智也「契約する前に気づかなかつた理由があるんですか？」

藤堂「ああ。白金の腕輪の開発で手一杯だつたんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

智也「悪い噂つてのは何ですか？」

藤堂「如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカツプルは幸せになれる』っていうジンクスをね」

明久「？ それのどこが悪い噂なんですか？ 良い話じゃないですか」

藤堂「そのジンクスを作るために、プレミアムチケットを使つてやつて来たカツプルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いても

ね

智也 「ほう」

雄二 「な、なんだと!」

明久 「どうしたのさ、雄二。 そんなに慌てて」

雄二 「慌てるに決まっているだろう! 今ババアが言つたことは、『プレオーブンプレミアムペアチケットでやつてきたカツプルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ!」

明久 「う、うん。 言い直さなくともわかってるけど」

藤堂 「そのカツプルを出す候補が、我が文月学園つてわけさ」

雄二 「くそつ。 うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。 学生から結婚までいけばジンクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然つてことか」

智也 「まあそういうことだねー」

藤堂 「ふむ。 流石は神童と呼ばれていただけはあるね。 頭の回転はまづまづじゃないか」

明久 「雄二、 とりあえず落ち着きなよ。 如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、 第一僕らはその話を知つてはいるんだから、 行かなければ済む話じやないか」

智也「他の人だつたらね」

明久「え？ どういうこと？」

雄二「・・・絶対にアイツは参加して、優勝を狙つてくる・・・。行けば結婚、行か  
なくとも『約束を破つたから』と結婚・・・。俺の、将来は・・・！」

藤堂「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定し  
ようつて計画が気に入らないのさ」

智也「じゃあ交換条件つてのは——」

藤堂「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室の改修くらいし  
てやろうじゃないか 無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじやないよ。譲つて  
もらうのも不可だ。私はお前達に召喚大会で優勝しろ、と言つてるんだからね」

智也「あの・・・」

藤堂「なんさね？」

智也「僕も出るんですけど良いですか？」

藤堂「もちろん。協力者は多い方がいいさね」

智也「ありがとうございます」

明久「・・・僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんです  
ね？」

藤堂「何をいつてるんだい。やつてやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ。ただし、清涼祭で得た利益で何とかしようつていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑つてやってもいい」

智也「ありがとうございます。その話引き受けます」

藤堂「そうかい。それなら交渉成立だね」

雄二「ただし、こちらからも提案がある」

藤堂「なんだい？ 言つてみな」

雄二「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、

一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

藤堂「それがどうかしたかい？」

雄二「対戦表が決まつたら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

藤堂「ふむ・・・。いいだろう。点数の水増しとかだつたら一蹴していただけど、それくらいなら協力しようじやないか」

雄二「・・・ありがとうございます」

藤堂「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」

雄二「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

明久 「絶対に優勝して見せます。そつちこそ、約束を忘れないように！」

智也 「おいおい、調子乗んなつての」

雄二 「それはどうだかな」

藤堂 「それじや、ボウズども。任せたよ」

明久、雄二 「おうよつ！」

智也 「はーい」

こうして僕たちの清涼祭が始まつた

# 第十一問～清涼祭開始！！～

美波 「いつもはただのバカに見えるけど、雄二の統率力は凄いわね」

明久 「ホント、いつもはただのバカなのにね」

智也 「あの集団をまとめあげるなんて凄いよ」

清涼祭初日の朝

僕らの教室はいつもの小汚ない様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた  
明久 「このテーブルなんて、パツト見は本物と区別がつかないよ」

瑞希 「あ、それは秀吉君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持つて  
きて、こう手際よくテキパキと」

秀吉 「ま、見かけはそれなりのものになつたがの。その分、クロスを捲るとこの通り  
じゃ」

美波 「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

智也 「そうだね。見られたとしてもきっと胸の内にしまつといてくれるよ」

瑞希 「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよ、  
きっと」

明久 「室内の装飾も綺麗だし、これならうまいくいくよね？」

智也 「いつたらしいけどねー」

康太 「・・・飲茶も完璧」

明久 「おわつ 康太、厨房の方もオーケー?」

康太 「・・・味見用」

瑞希 「わあ・・・。美味しそう・・・」

美波 「康太、これウチらが食べちゃっていいの?」

智也 「美味しそー」

康太 「・・・(コクリ)」

秀吉 「では、遠慮なく頂こうかの」

パクッ

瑞希 「お、美味しいです!!」

美波 「本当! 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし!」

秀吉 「甘すぎないところも良いのう」

智也 「うん!うん!」

瑞希 「お茶も美味しいです。幸せ・・・」

美波 「本当ね〜・・・」

明久「それじや、僕も貰おうかな」

康太「・・・・（コクコク）」

明久「ふむふむ。表面はゴリゴリでありますながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味  
わいがとつても一ーンゴパツ」

智也「大丈夫!？」

秀吉「あ、それはさつき瑞希が作つたものじやな」

康太「・・・・!!（グイグイ!）」

明久「こ、康太！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの？無理だよ！食べられないよ！」

智也「お、恐ろしい・・・」

雄二「うーっす。戻ってきたぞー」

明久「あ、雄二。おかえり」

雄二「ん？なんだ、美味そうじやないか。どれどれ？」

智也「ま、また被害者が増えた・・・」

秀吉「・・・たいした男じや」

明久「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

雄二「？お前らが何を言つてゐのかわからんが・・・。ふむふむ。表面はゴリゴリ

でありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつてもーーんゴパツ

明久 「あー、雄二。とつても美味しかったよね？」

雄二 「ふつ。何の問題もない あの川を渡ればいいんだろう?」

智也 「正気に戻つて！その川は駄目だ！渡つたら戻れなくなつちやう！」

瑞希 「え？あれ？雄二君はどうかしたんですか？」

美波 「あ、ホントだ。雄二、大丈夫？」

明久 「大丈夫だよ、ちよつと足がつっただけみたいだから。おーい、ゆーじー、おき

ろー」

雄二 「六万だと？バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まつてーーはつ!?」

智也 「良かった・・・」

明久 「雄二、足がつったんだよね？」

雄二 「足がつった？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の一ー」

明久 「(・・・もう一つ食わせるぞ)」

雄二 「足がつったんだ。運動不足だからな」

雄二 「(・・・明久、いつかキサマを殺す)」

明久 「(・・・上等だ。殺られる前に殺つてやる)」

智也 「そういえばどこに行つてたの？」

雄二「ああ、ちょっと話し合いにな」

瑞希「そうですかー。それはお疲れ様でした」

雄二「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな?」

秀吉「バツチリじや」

康太「・・・お茶と飲茶も大丈夫」

雄二「よし。少しの間喫茶店は須川と康太に任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

美波「あれ? アンタたちも召喚大会に出るの?」

智也「僕らも出るよ」

明久「え? あ、うん。色々あつてね」

智也「秀吉いくよー」

秀吉「了解じや」

移動中——

先生「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます。三回戦までは一般公開もあ

りませんので、リラックスして全力を出してください」

智也「たしか地理だつたよね」

秀吉「そうじやの」

先生「では、召喚してください」  
全員「サモンつ！」

2  
—  
D

地理

97点

香川希

2  
—  
D

山田美香

102点

2  
—  
F

木下秀吉

76点

&

V  
S

&

2 — F

北山智也

523点

D 「嘘！なにその点数！」

智也「教科が地理だったのを恨むんだね

よつ」

瞬きすら出来ないようなスピードで斬りつけたと思つきや

D 「きやあ！」

智也「そんでもう片方は腕輪の能力だよねー。熱線！」

キュボツ

腕輪の能力を使い一瞬で敵を蹴散らした

D 「そんな！」

2 — D

香川希

地理

d e a d

&amp;

智也 先生 「勝者、北山・木下ペア」  
秀吉 「何もしてないのじや」  
「次から頼むつて」

4  
7  
3  
点

北山智也

2  
—  
F

木下秀吉

2  
—  
F

山田美香

2  
—  
D

7  
6  
点

d  
e  
a  
d

&

V  
S

秀吉「分かったのじや」

廊下一一

智也「うーす」

雄二「その様子だと勝つたみたいだな」

智也「もちろん。雄二達も勝つた?」

雄二「俺らを誰だと思つてる」

智也「いうね!」

須川「お前ら。急いで教室に戻つてきてくれ」

明久「あれ?喫茶店で何かあつたの?」

須川「ああ。少し面倒な客が来ててな 話は歩きながらで頼む」

智也「営業妨害?」

明久「あはは、まさか。学園祭の出店程度で営業妨害なんて出てこないんじやない?  
そんな真似をしたところで何のメリットもないと思うよ」

須川「いや、それが北山の言つた通りなんだ」

雄二「そうか。相手はどこのどいつだ?」

須川「うちの学校の三年だ」

明久「ま、そういうトラブルなら雄二にお任せだね。チンピラにはチンピラを充てる

のが一番だよ」

雄二「それが人にものを頼む態度か？・・・まあいい。喫茶店がうまくいかなければ、明久の大好きな瑞希が転校してしまうからな。協力してやろう」

明久「べつ！別にそんなことは一言も・・・！」

雄二「あー。わかつたわかつた」

明久「その態度は全然わかつてない！」

秀吉「む。あの連中じやな」

雄二「じや、ちよつくら始末してくるか」

？「マジできつたねえ机だな！これで食い物扱つていいのかよ！」

智也「絵に描いたようなチンピラだねー」

明久「そうだね」

客「うわ・・・確かに酷いな・・・」

「クロスで誤魔化していたみたいね」

「学園祭とは言つても、一応食べ物のお店なのに・・・」

明久「雄二、早くなんとかしないと経営に響くよ」

雄二「そうだな・・・。秀吉、ちよつと来てくれ」

秀吉「?なんじや？」

雄二「至急用意してきて欲しいものがあるんだ」

秀吉「一応用意はできるが・・・。

あつても二つ程度じやぞ?」

雄二「それで充分だ。その後はまた他から調達していくさ」

秀吉「了解じや。すぐに戻る」

雄二「お前らあの小悪党どもの特徴を覚えておけ」

智也「りよーかい」

明久「? 良く分かんないけど、了解」

? 「まつたく、責任者はいないのか! このクラスの代表ゴペツ!」

雄二「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか?」

智也「殴り飛ばしてなければね・・・」

? 「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが・・・」

雄二「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する暴流ですか?」

? 「ふ、ふざけんなよこの野郎・・・! なにが交渉術ふぎやあつ!」

雄二「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で締める交渉術』

が待つてますので」

? 「わ、わかつた! こちらはこの夏川を交渉にだそう! 僕はなにもしないから交渉は

不要だぞ！」

夏川「ちよ、ちょっと待てや常村！」

お前、俺を売ろうと言うのか!?」

雄二「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか?」

常村「い、いや、もう充分だ。退散してもらう」

雄二「そうか。それならーー」

夏川「おいつ！俺もうなにもしてないよな!?どうしてそんな大技をげぶるあつー！」

雄二「ーーこれにて交渉は終了だ」

常村「お、覚えてろよー！」

客「流石にこれじや、食つていく気がしないな」

「折角美味しそうだつたんだけどね」

「食つたら腹壊しそうだからなあ」

智也「まあそうだよね」

明久「うん」

客「店、かえるか」

「そうしようか」

明久「あ、お客様さん!・」

雄二「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたので、暫定的にこのような物を使つてしましました。ですが、たつた今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください」

美波「あれ? テーブルを入れ替えてるの?」

明久「あ、おかえり。美波に瑞希ちゃん。一回戦はどうだつた?」

瑞希「はいっ。何とか勝てました」

美波「そんなことより、テーブルを入れ替えちゃつてもいいの? 演劇部にあるテーブルなんて、そこまで多くはないはずでしょ?」

雄二「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせて頂きますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎ下さい。ふう。こんなところか」

智也「お疲れさん」

明久「お疲れ、雄二」

瑞希「お疲れ様です」

雄二「おう。瑞希に美波か。その様子だと勝つたみたいだな」

美波「一応ね。それより、喫茶店は大丈夫なの?」

智也「このまま妨害がなければ大丈夫」

瑞希 「あの、持つてくるテーブルは足りるんですか?」

雄二 「ああ、それか。そうだな・・・。明久、二回戦まではあとどのくらい時間がある?」

明久 「小一時間ってところかな」

雄二 「そうか。あまり時間がないな・・・。ちやつちやと行くか。明久、ついてこい」

美波 「ウチらは手伝わなくていいの?」

雄二 「お前らは喫茶店でウエイトレスをやつっていてくれ。落ちた評判を取り戻すために、笑顔で愛想良く、な」

瑞希 「はいっ! 頑張りますっ!」

智也 「いつてらっしやーい」

雄二 「おい明久。行くぞ」

明久 「あ、うん。でもどこに行くのさ?」

雄二 「テーブル調達だ」

智也 「良し、はやく仕事するよー」

皆 「おうつ!」

50分後――

智也 「秀吉、そろそろ二回戦の時間だよ」

秀吉 「そうじやな、ではいくとするかの」  
僕たちは二回戦へと向かつた。